

目 次

1. はじめに	1
2. 影差一寸千里の検証	4
3. 影差一寸千里で東京大阪間を検証	9
4. 東西方向の計測 考察	9
5. 総里数の誤差の要因を探る	15
6. 地図作成にあたって	16
7. 邪馬壹国の方位と里数	18
8. 女王国までの推定全行程	19
9. 邪馬壹国の位置イメージ	20
10. 邪馬壹国位置図	21
11. 伊都国の位置図	23
12. 奴国の位置図	24
13. 不弥国の位置図	25
14. 投馬国の位置図	26
15. 邪馬壹国・女王之都の位置図	27
16. その他の比定地	28
17. 参考資料	31
海島算経図解	31
海島算経の測定方法	32
海島算経応用の測定方法（1）	33
海島算経応用の測定方法（2）	34
海島算経応用の測定方法（3）	35
歩の検証	36
卑弥呼の墓	37
邪馬台（壹）国の争点 他説との比較	39
原資料 三国志（南宋紹熙年間刊行の原本の影印のコピーを写す）	42
海島算経抜粹要訳	47
周髀算経 抜粹	48
旧唐書・隋書抜粹	49
谷本茂氏の一寸千里の補足説明	50
算経十書概略	51
邪馬壹国論争比定地	52

1. はじめに

40 数年前の学生時代に、古田武彦氏の『邪馬台国はなかった』に出会って以来、自分ものんびりと『邪馬壹国』(原書三国志は臺でなく壹)を探す人生の旅に出ました。

長里短里の風が吹く中、近畿や九州のパンフレットを見て迷っていました。

さらに、奈良方面の遺跡や佐賀の吉野ヶ里遺跡は勿論のこと、遠くは壱岐対馬にまで行きたいとも思いました。

道案内は原書『三国志』とわずかの『解釈パンフレット』。出発点は唐津に決定。

以来、長い年月が過ぎました。バブルの波に乗って本来の建築設計や機械設計の仕事が忙しくなりました。あちらこちらと海外旅行にも行きましたが、ライフワークの『邪馬壹国』探しの旅には行けませんでした。

その間、佐賀県の吉野ヶ里遺跡の大規模遺構の発見や奈良での三角縁神獣鏡(卑弥呼が魏王からもらったと言われていた)の大量出土があり、続いて同じ奈良の纏向遺跡(邪馬壹国近畿説論者から卑弥呼の居館といわれている)の発掘も行われました。

三国志に次のような一節があり常々気になっていました。

「自女王国以北其戸数道里可得略載」女王国より北は戸数や道里を得ることができたので略して載せると解釈できます。

続く文章は「其余傍国絶不可得詳」そのほかの国は、絶遠している(戸数や道里を)詳しく得ることができない(よって載せない)。としています。

それに関連するのですが、もう一つ気になっていたことがあります。三国志の次のような一節です。

「倭循海岸水行歴韓国乍南乍東到其北岸狗邪韓国七千余里」及び「自郡至女王国万二千余里」の部分です。

「帯方郡から狗邪韓国まで七千余里」で、「邪馬壹国の女王の都までは一万二千余里だ」ということです。

道里を詳しく得る方法があったとは、測量、計測の学問と技術の事と推測できましたが、確たる裏付けはありませんでした。

その後、古代中国の『算経十書』の存在を知り原文を収集しました。

前2世紀頃にできたといわれている『周髀算経』にある用語はそのほとんどが今日私達が使用している語句です。

例えば、「一歳三百六十五日四分之一日」「春分、夏至、秋分、冬至」「(周は径×3)」「三乗」「北極」「大寒、啓蟄、立秋、立冬、小雪、大雪」「閏月」「十二月朔日」「大歳」「日出入」「東南、西南」「曜日」「甲子」「水平」「二十八宿」等々。

再度繰り返しになりますが、日本の卑弥呼の時代よりさらに数百年前に古代中国で既に確立されていた言葉なのです。

殆どの学説が、三国志の「南東」は「北東」の間違いだとか、里数も間違っているとか、三国志の筆者は女王国には行っていない、だから本当の事を知らないのだと言っています。

しかし、日本の弥生時代に、中国には高度な学問が存在していたのです。その中の『周髀算経』に「影寸千里」という文字を見つけました。これは、夏至の日の南中時の影の長さから二点間の距離がわかるというのです。地球を平面と考えていたのでわずかの誤差はありますが、後述するように驚くほどの正確さです。

現在でも住居地域に高い建物を造るときに影倍率を使って日照時間を算出するのですが、距離まで計測していたのには驚きました。よって遠距離計測に向いています。

また「影寸千里」から千里が何Kmかを算出できます。これは後日その存在を知ったのですが谷本茂氏の説と近いものです。谷本氏は影倍率の差に地球の極半径を掛けて千里のキロ数を算出していますが、私は千里間の影倍率を緯度に換算して緯度1°が約111.317Kmであることから千里のキロ数を算出しました。

郡から狗邪韓国間や郡から邪馬壹国女王都までの南北方向の距離を測る方法は、この方法しかなかったと考えられます。

又、中国で2世紀頃にできたといわれている『海島算経』の測量学は平板測量とほぼ同じで、近年の測量機器の発展や機器がデジタル化になるまで、広く用いられていた測量方法に近いものです。有視界範囲では、二点間の距離や高さなど、若干の誤差はありますが、近似値を得ることができます。双方から望めるような高い山や目印があれば、二点間を直接測らなくともその距離がわかります。倭国内を測量するのに適しています。

残念ながら三国志にこれらの測量方法は記述されていません。

しかし、七千余里とか一万二千余里との一節から、又里数を得ているとの言葉から類推すると、当時中国で用いられていた測量技術で導き出された答えであると思われます。

本文に詳述するように、三国志の方位も距離も全てが正しいとして朝鮮半島を含む日本地図の中に「コンパスと定規」を使用して邪馬壹国を計測してみました。

結果、水行二十日や水行十日陸行一月の意味も、その他の倭の国々の事も原本の通りで地図上にピッタリ当てはまることに驚きました。

- | |
|--|
| <p>1、『周髀算経』の「影寸千里」の法から千里が何キロになるのかを明らかにし、現実的な例題を出して、その精度を検証してみます。</p> <p>2、当時中国で用いられていたと考えられる『海島算経』の測量方法を概説します。</p> |
|--|

邪馬壹国探しに当たってこれらの算出方法を大前提として、方位も里数も三国志のままにいよいよ旅を進めます。

以上のことをあらかじめまとめた頃の2011年、東日本大震災と福島第一原発の原子炉爆発が起きました。以来無我夢中の三年半を過ぎて最近、ようやく邪馬壹国の旅を再開し、修正を加えながら、力不足ですがここに素晴らしい40数年の長い旅を終えることができました。共に旅をしてくれた妻に感謝してペンを置きます。

長年の散文を集めた部分もあるため、内容が重複している所もあります。

また、文章がいたらぬ点などはお許しください。

2015年 正月元旦

・本書では出来るだけ常用漢字に改めました。

國→国、餘→余、彌→弥、數→数、旁→傍、萬→万、對→对、壘→嶋
與→与、邊→辺、來→来

2. 影差一寸千里の検証

当時の中国で確立していた測量の方法などをまとめた『周髀算経』の中の「影寸千里」を検証します。

2地点で夏至の南中時に長さ8尺の棒を立て、影の長さを測ると、その差が1寸のとき2点間の南北の距離は千里あるとのことです。

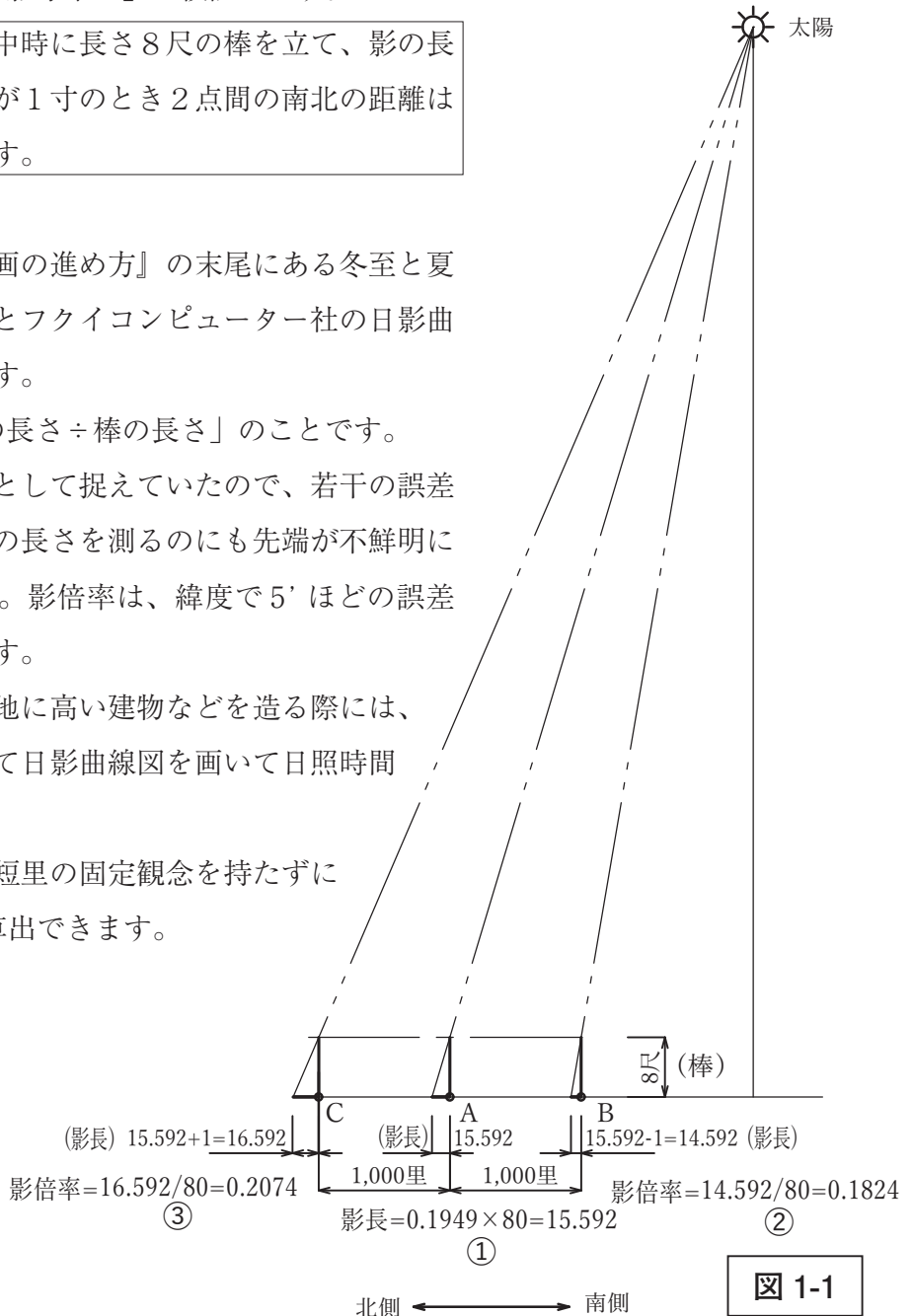
顕国社刊『日照計画の進め方』の末尾にある冬至と夏至の影倍率の一覧表とフクイコンピューター社の日影曲線ソフトを使用します。

影倍率とは、「影の長さ÷棒の長さ」のことです。

当時は地球を平面として捉えていたので、若干の誤差はあります。又、影の長さを測るのにも先端が不鮮明になり誤差が生じます。影倍率は、緯度で5'ほどの誤差の範囲を持っています。

今日でも専用住宅地に高い建物などを造る際には、冬至の影倍率を用いて日影曲線図を画いて日照時間を検討しています。

この方法なら長里短里の固定観念を持たずに1,000里が何Kmか算出できます。



・洛陽の場合

洛陽の緯度は34.48°
緯度1° =111.317Kmとします。

	影倍率(夏至)	緯度	緯度の差	Km
B	0.1824	33.785°	0.695°	77.365
A	0.1949	34.48°		
C	0.2074	35.165°	0.685°	76.252

平均 76.808 Km

日影図を画くソフトで左表の緯度を入力すると、表の影倍率が表示されます。影倍率が表の数値になるまで変化させます。影倍率が表の数値になったときの緯度が左表です。

参考資料: 顕国社刊『日照計画の進め方』
使用ソフト: フクイコンピューター社の日影曲線図

図 1-1

・九州中部の場合

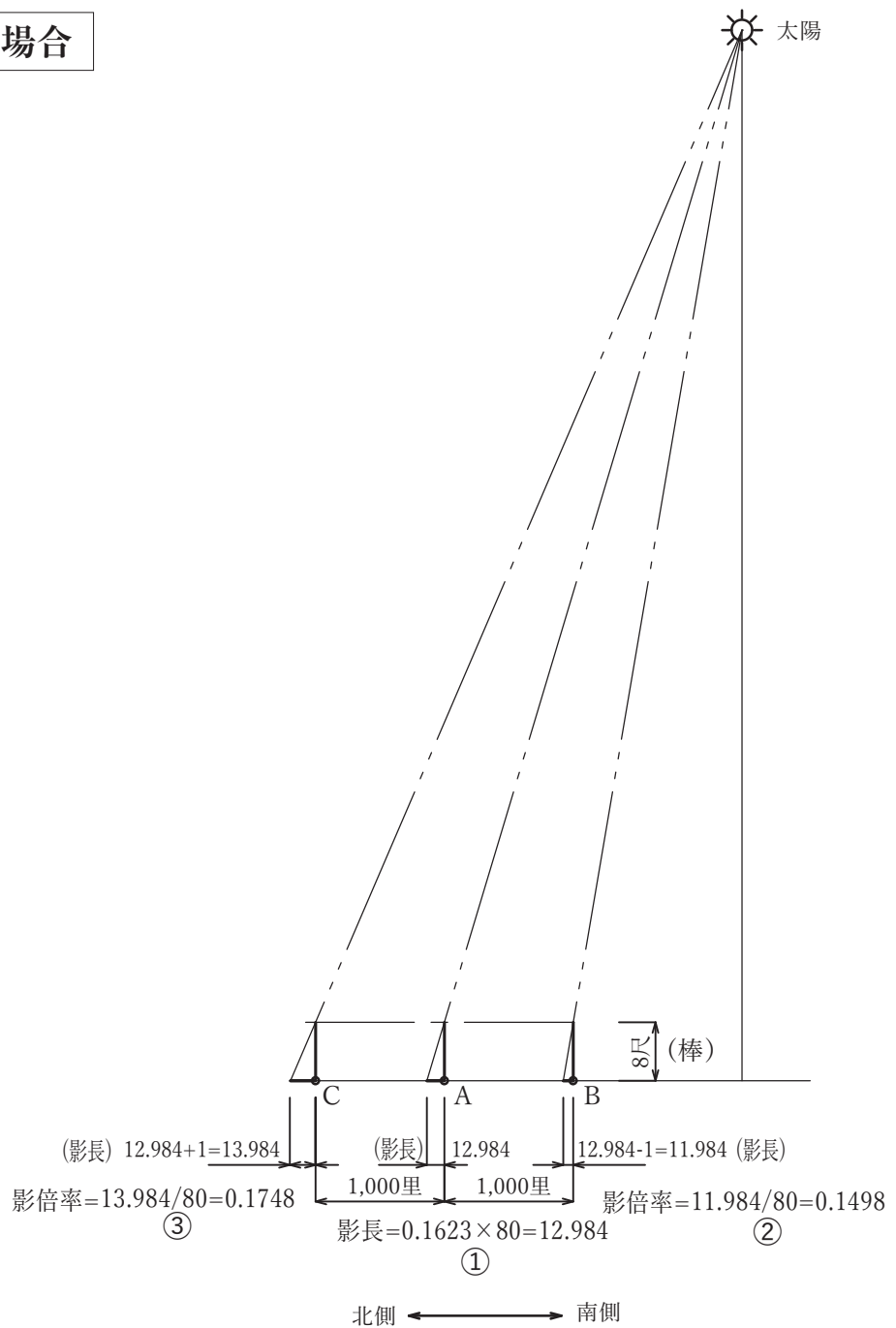


図 1-2

九州中部の緯度を32.667°と仮定する。
緯度1° = 111.317Kmとします。

	影倍率(夏至)	緯度	緯度の差	Km
B	0.1498	31.968°	0.699°	77.810
A	0.1623	32.667°		
C	0.1748	33.363°	0.696°	77.476

平均 77.643 Km

・九州北部の場合

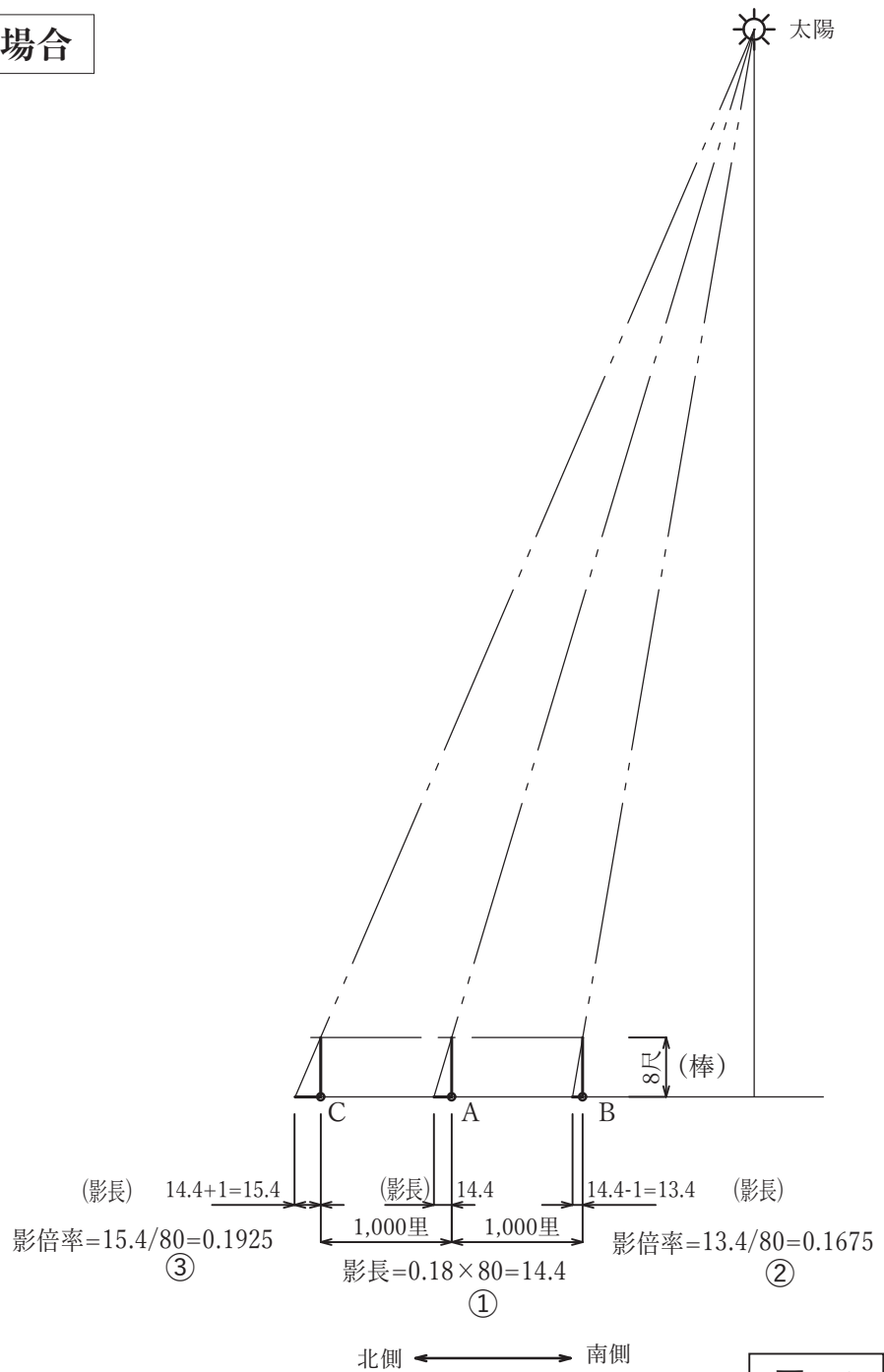


図 1-3

九州北部の緯度を32.667° と仮定する。
緯度1° =111.317Kmとします。

	影倍率(夏至)	緯度	緯度の差	Km
B	0.1675	32.96°	0.707°	78.710
A	0.1802	33.667°		
C	0.1925	34.345°	0.678°	75.473

平均 77.09 Km

・緯度 36° の場合

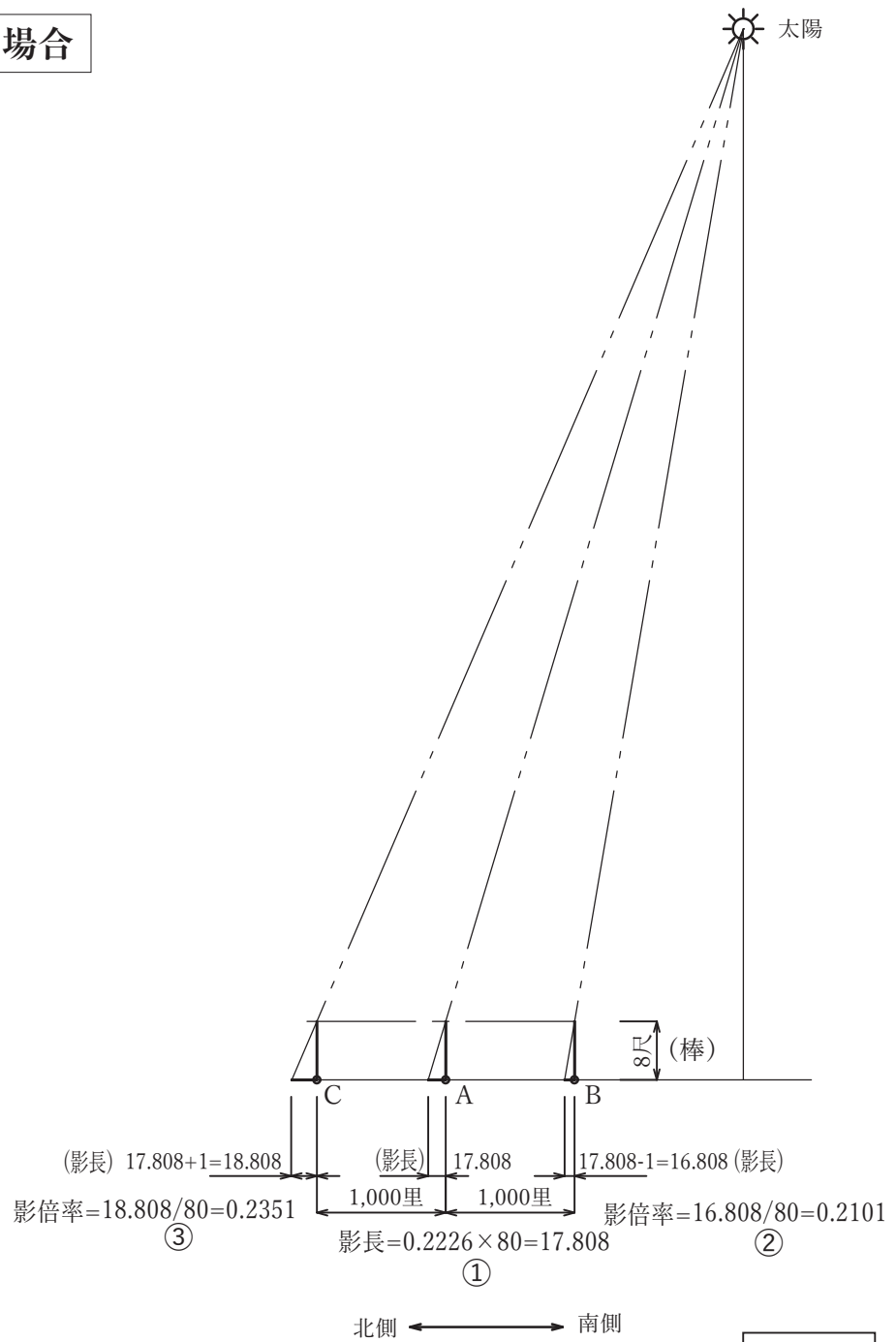


図 1-4

緯度を 36° と仮定する。
 緯度 1° = 111.317Km とします。

	影倍率(夏至)	緯度	緯度の差	Km
B	0.2101	35.318°	0.682°	75.918
A	0.2226	36°		
C	0.2351	36.68°	0.68°	75.695

平均 75.806 Km

【解説】

1,000 里が何 Km かを求める前提条件は、

① 1,000 里で 1 寸の影の差であること、②緯度 1° が 111.317Km であること（赤道径の場合）です。

従って二点の緯度が分ればその差から二点間が何 Km かわかります。

そのためにまず、それぞれの点の影倍率を求めその倍率の差から、それぞれの「緯度」を求めます。

ただし、ここでは日影ソフトを使うので、影倍率から緯度が直接分ります。

緯度 1° が 111.317Km であることから、二点間の緯度の差が何 Km かを出します。

幾つかの例題で 1,000 里が何 Km かを検討しましたが、北に行く程小さくなります。

全体的にはおよそ 75Km ~ 77Km の範囲になります。従って、その平均をとって 1,000 里を **76Km** とします。

後日、谷本茂氏の解釈を知りましたが、この影倍率の差に地球の極半径 (6,357Km) を掛けて千里のキロ数を算出しています。影倍率がラジアンになっていますが、原理は同じです。谷本氏は千里を 76.3~76.9Km とされており、平均 76.7Km です。

谷本氏は極半径を用いたのに対し、北緯 45° より南なので赤道半径を用いました。

12,000 里でも 10.8Km の違いです。近畿地方に行くほどの誤差ではありません。最近では (公社) 日本測量協会も 76Km が正しいとしたことを知りました。

「影寸千里」の法を見事に御紹介された古田氏や谷本氏がどうして三国志の末盧国から先の方角を間違いとするのか、理解に苦しみます。方角の出し方も『周髀算経』にはあります。これ程の測量学があれば、 90° あるいは 45° も測定ミスを起こさないと思います。金印や糸半島や放射線状型も脇に置き、三国志に書いてある通りに、末盧国から東南に旅をしようではありませんか。

3. 影差一寸千里で東京大阪間を検証

二千年以上も前に確立された影差一寸の法がどれくらいの精度であるかを知るため、ここで東京都庁舎と大阪府庁舎間の距離を影長さの差から計測してみましよう。

東京都庁舎の夏至の日の南中時（12:00）の影倍率は 0.2169 なので棒長さの 8 尺を掛けると 17.352 寸になります。

大阪府庁舎の夏至の日の南中時（12:00）の影倍率は 1.987 なので棒長さの 8 尺を掛けると 15.896 寸になります。

東京都庁舎と大阪府庁舎の影の差は $17.352 - 15.896 = 1.456$ 寸になります。1 寸で 1,000 里なので南北間は 1,456 里になります。千里が約 76Km なので 110.66Km になります。

地図上で測定すると 111.4Km です。99.3%の精度になります。

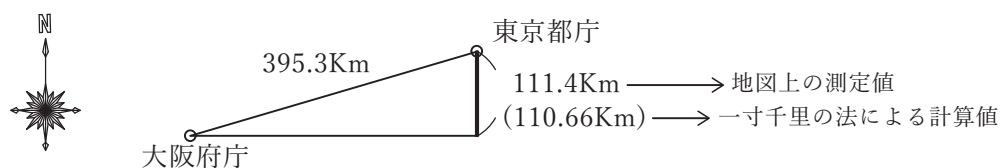


図 2

4. 東西方向の計測 考察

東西方向の距離の求め方で「周髀算経」の訳書「周髀算経図解」には次頁の図 3 があります。弦が夏至南中の影倍率線なので図に 2 測点のこの影倍率線を天中を通るように入れ周線の長さの差を測り出せば、これが東西方向の距離だと言うことのようにです。

太陽までを 810,000 里としているため現実とかなりの誤差が出てしまいます。

太陽までを 1,496 万 Km にして東京都庁と大阪府庁舎間をやってみました約 416Km になってしまいました。約 1.09 倍です。唐津と高千穂も約 1.09 倍の誤差がありました。

太陽までの距離を現在のものにして、夏至の 10 時半と春分の午前 8 時から 11 時まで試してみました。現実と大差が出ました。側点の緯度と蓋天説からくる誤差と考えられます。

太陽の角度、影倍率を東西方向に修正、すなわち春分の日東西方向の影倍率に太陽までの距離を掛けてみましたが駄目でした。私の理解力が至らぬかもしれません。

東西方向を求めるのには、影寸千里の法は当てはまらないのではないだろうか。この方法では緯度によって地球半径が違うのでどちらにしても正しい数値はないと思います。やはり東西方向を求めるのには、精巧な時計の登場が必要だったように思います。

【周髀算経及び周髀算経図解】より筆者解釈

周髀算経は紀元前二世紀頃の中国の天文学をまとめたもの

周髀算経図解は江戸時代の解説書

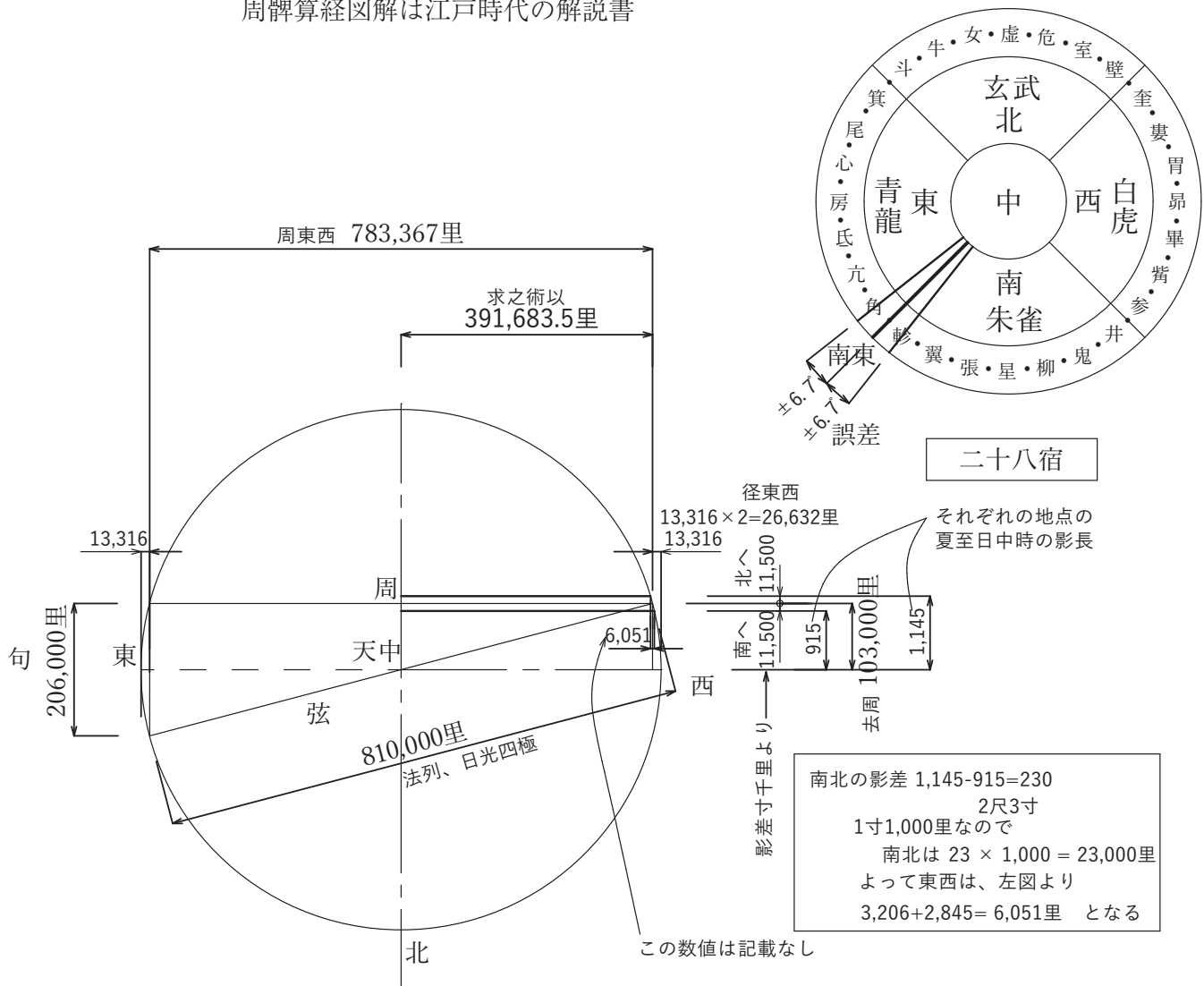


図 3

注) 原本の124,500里は114,500里の誤記か。

影長114.55寸×1000里ゆえ

三国志の魏志倭人伝の中に帯方郡より邪馬壹国の女王の都まで万二千里とあります。直線距離と推測できますが、どのようにして出されたものか謎でした。

南北方向については当時用いられていたと思われる影の長さの差から算出できることが理解できます（別項 P4 参照）。大きな誤差がありますが東西方向の距離も同様に出していたことがわかりました。（図 3 参照）

天中からの南北の離れ 103,000 里を下図の東西ライン（周）として引く。

天中を通る東西の距離 810,000 里とライン（周）との差が東西方向の差になるという。

しかし、これは前提条件の天の極径 810,000 里に不明確さがあり、いろいろ試してみたが前項に延べた通り、どうも解読できませんでした。

よってここからは私見なので、正論ができればこの部分を破棄されたい。

大海を挟み、直接の遠望もきかないような場合、南北の距離は影差で読んで、方角は二十八宿（参照 P10）を当てはめて出し、句股の法（三平方の定理）で弦、即ち直線距離を算出したのではないのかと考え、この方法で郡と金海（狗邪）間、郡と高千穂（女王之都）間を測定してみます。

郡から 45° のラインを引く。郡から半径 7,000 里の弧を描く。その交点から水平にラインを引く。郡と南北の距離（水平ラインまでは）は影から出しているので正解とすると水平線は郡から 4,950 里のラインになる。そのライン付近に測点（狗邪）はある筈だ。するとラインから約 5.48° ずれて現在の金海市にぶつかります。

同様に郡から 45° のラインを伸ばす。郡から半径 12,000 里の弧を描く。その交点から水平にラインを引く。郡と南北の距離（水平ラインまで）は影から出しているので正解とすると水平線は郡から約 8,486.56 里のラインになる。そのライン付近に測点（都）はある筈です。

45° ラインから約 6.55° ずれた所に高千穂の岩戸神社があります。

どちらも 45° ラインに対して西側に数度のずれがあります。二十八宿から見ても誤差の範疇です。（しかし、距離にすると約 41.5Km と約 57Km もの誤差になります。）

この方位の精度は驚きです。山当てなどではありません、（図 3 参照、P10 の二十八宿図）

又、周髀算経には「以漏度之者一日一夜百刻」とあります。漏とは水時計のことで一昼一夜を百に刻んで時を計ったのです。

しかし、これで2点間の東西距離を算出したとは書かれていません。又、水時計が正式に日本に伝わったのは、奈良時代の頃です。(持ち込んでいても倭人に技術の伝達をしなかったことはあり得ますが)図3の原理から出したのでしょうか。

遠方の地点の方角を数度の誤差で測定できる技術をもっていたことは驚きです。

東南と北東を誤認したり、九州と奈良を間違えることは、まずあり得ません。

倭国内の測量に当たっては、郡から女王の都までを測って出た57Km余りの誤差を持ち込む必要がないと思います。

末盧国から女王の都までの2,000里余り、或いは不弥国から1,300里余りと分っているのだから、ここに絞って計測すればよい。遠い距離なら誤差も大きいかもしれないが、近くなれば少ないだろう。

郡の位置は、狗邪や女王の都が決定された後に、求めればよい。

影の測定は読み方でかなりの誤差がでるが、二方向から同じ山を望むような海鳥算経にあるような三角測量的なものだったら誤差は5%以下に抑えられます。

勿論、末盧国の位置が唐津でないのならこの説は成り立たないことは大前提です。

現在でも影の測定に関しては、 $\pm 5'$ 程度の誤差が容認されています。距離に直せばおおよそ $\pm 9.2\text{Km}$ 程度です。又、2点間の影測定は緯度 1° が約111Kmだが南北にその半分以上離れないと計測に向きません。

唐津と高千穂とでは机上では成り立つが、現実的にはギリギリのところでしょう。

倭国内はむしろ海鳥算経によったと考えるのが妥当です。その方が方角も読めます。2点間の東西方向の距離を測るには、理論的には、A点の南中時とB点の南中時の影長の差を計るか、同時間に2点からの太陽高度を計れば出ます。

1日(360°)を100に刻み何刻の差が生ずるかを計ればよい。地続きなら遠方の狼煙を見て大雑把でも測定は可能です。

しかし、2点間が大海を隔てて目視、あるいは狼煙を確認できる関係になかった場合でかつ時計を持ち運びできなかつたり、精度が芳しくなかったとしたらこ

の方法は使えません。水時計は船の揺れに使えないでしょう。日蝕や月食の測定から経度を測定する方法はもう少し過ぎてからになると思われます。

司南や渾天儀が存在していたが使用されたかどうかはわからない。方角の誤差から推測すると、使用したことは十分考えられる。とすれば、唐津上陸後に方向誤認などとの言葉を言うこと自体恥ずかしいことです。

経度の測定は特に海上では難しく、クロノメーターの発明まで正確には測定できませんでした。

コロンブスも 1494 年と 1504 年の航海の時、月食を見て経度を測定しましたが、誤差が大きいことがわかりました。英国では 1713 年、数学者の 2 人が海上での経度測定方法を考案しました。一定間隔で船を並べ一定間隔でそれぞれの船から大砲を打つというものでした。英国議회를巻き込むほどの関心事だったようです。

正確なクロノメーターは 1730 年ジョン・ハリソンによって作られてからで、1761 年から 1762 年に掛けて英国からジャマイカまでテスト航海が行われました。81 日間で 5.1 秒の誤差でした。

クロノメーターが普及したのはさらに後年のことでした。

経度測定には、このほか日蝕や月食から求める方法がありますが 1500 年頃の成立です。

近年衛星が使用されるようになる以前は、経度測定には、基本的に同じ精度の二つの持ち運びの出来る時計が必要でした。

遠く隔てた東西方向の距離を計測することがそれほど大変なことだったので

従って、先の図の原理で東西間の距離が出せるとするなら、大変な発見です。

平面と球面、地球軸の傾き、地動天動など現代科学からすればかなり幼稚といわれるかもしれないし誤差がありますが、一応机上での解説はしたつもりです。

影差一寸のまとめ

少なくとも南北方向の距離を測るのに当時の中国では相当の技術があったことがわかりました。方角を読むにも数度の誤差で読んでいることもわかりました。

隋書に「古伝承では楽浪郡の境及び帯方郡から一万二千里」とあり三国志の「郡より女王国に一万二千里で至る」と同じです。仮に郡を沙里院として一万二千里即ち東南の線上に半径 912Km の円弧を画いてみて下さい。その近辺が女王の国なのです。

後述するように測定誤差があるので少しずれますが、どうやっても九州北部や近畿には行きません。三国志は里数も方位も正しかったのです。

従って、方角に 65° の誤認があるとの説は当時の中国の測量技術を無視したものであり、科学的ではありません。いや、ここに示す測量方法ではなかったのではと言うのであれば、明確な科学的裏付けを以て千里が何キロメートルかを示し、方位に間違いがあるとするとするなら、方角があてにならない絵図の「混一疆理歴代国都之図」ではなく、当時の技術に 65° も間違ふことがあり得る事を論証すべきです。

即ち周髀算経の方角の出し方が間違っているとか、そういう技術があったとしても倭国内では用いず、勘でやったというような論証です。

頭から文献を信用しない人もいるようです。しかしそういう人も三国志にあるヤマタイ（原本は邪馬壹国）国の固有名詞だけは信じているようです。

三国志には方里の答えがあるので、当時の測量方法を知ることは、最終目的から言って考古学以上の大成果と自負しております。

文献自体の信頼性も大事ですが、その評価基準に間違いがあったなら原本作者に失礼だけでなく、読者を惑わしたことにもなります。まず原本通りにやってみるべきです。日本地図を机上において、コンパスと定規を用意し、20 ページから示した様に、魏志倭人伝の通りに進めてみてください。水行表記も陸行表記も正しいことがわかるのです。

5. 総里数の誤差の要因を探る

帯方郡から女王都までの 12,000 余里と、帯方郡から狗邪韓国までの 7,000 余里にかなりの誤差がある (7.9%、6.6%) ので、要因を探ってみます。

東西方向の距離を読むのは非常に難しい。それはその地点の緯度によって経度の周長が異なるからです。当時の中国の文献「周脾算経」を読んでも今一つわかりません。恐らく方位を読む時の誤差か、星座を読むときの誤差からきたものだと思います。

それを下図に示してみました。

そうして見ると逆によくこれだけ正確に読めたものだと思います。完全な「山当て」ではなさそうです。

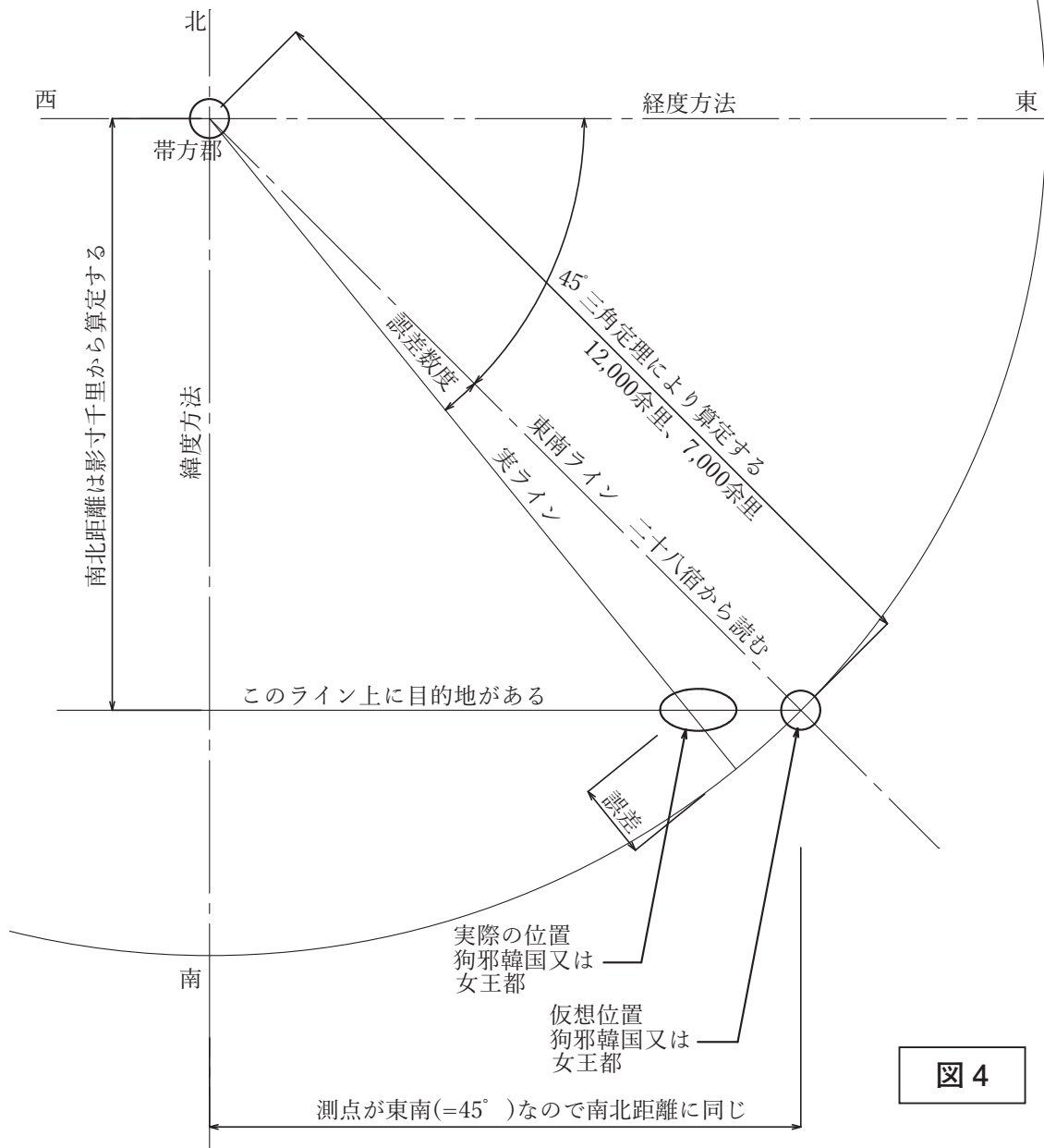


図 4

6. 地図作成にあたって

- 1) 図5、6は、邪馬壹国のおおよその位置を比定し、女王卑弥呼の住む都の位置を探るために作製したものです。原資料は「三国志」影印南宋紹熙刊本です。
- 2) 原資料の「自女王国以北其戸数道里可得略載其余傍国遠絶不可得詳」から、倭人伝が戸数や道里について、かなりの自信をもってまとめられている点に注目しました。又、「以北」なので投馬国も女王国の北側にあるはずです。
- 3) 距離は、影長差の検証により確定した千里イコール約76Kmを用います。
これは、位置が比定されている対海国（対馬）から末盧国（唐津）までの二千余里とピッタリ符合します。
「余里」は百里単位に四捨五入しているものと考えました。
すなわち±五十里（±3.8Km）を誤差の範囲としました。
ただし、末盧国から不弥国までは、「余里」がないので、本図にも入れませんでした。
よほどの測量技術があったことが「余里」がないことからわかります。
- 4) 方位については、「東南」「南」「東」の表現から八方割と考え、各8方位が45°の範囲を持っていると思いますが、本論ではその半分とし、八方ラインは±11.25°の誤差の範囲を持つと仮定しました。
『海島算経』には、東西南北の出し方が明確に出ています。南を東に間違えることはなかったと思います。郡から女王の都でさえ約6.55°の誤差でよんでいたのです。
- 5) 島間の距離を測るには、目安となる山までを算定することが『海島算経』に出ています。
港まで「千余里」の場合、島（一大国）の高山から港（末盧国）までの距離はすでに四捨五入されて「余」に含まれているのは当然です。では港から末盧国の行政の中心地までの距離はどこに入っているのでしょうか。これは、島も同じなのですが、「末盧国」も同じで、記されておられません。「渡一海」

の表現からして、あくまで島から末盧国の港までの里数と思われませんが、次の伊都国からが行政の中心地（起着点）であろうことを考えると、末盧国は港近辺が行政の中心地（都）だったのではないのでしょうか。

- 6) 倭国に入ってから表記の里数は各国の行政の中心地（都）間の距離を直線距離で示したものと推定しました。それを本図では起着点と呼ぶことにします。

柳川近辺の大昔を想像して下さい。

例えば巾数メートルの水路が網の目のような場所でまともな橋もなかったら小舟の方が便利です。例えば不知火の海岸線を南下するなら山や草むらや川を渡るより小舟の方がよかったとも考えられます。

中国で「水」は大河、大海でない川や湖などを言います。三国志にある「水行」は渡海ではありません。柳川の水路や波静かな不知火の海などは「水行」の表現にあてはまるのではないのでしょうか。

又、山道が獣道同様に雑草が生い茂り、整備されていなかったり、川や谷に橋がなかったり、時に増水でもしていたとしたら、山中の距離を測っても意味を持たなかったでしょう。日数表現にした理由がそこにあると思います。

又、前にも示した「自女王国以北其戸数道里可得略載其余倭国遠絶不可得詳」の部分から考えると、「女王国以北は戸数や道里を（かなり詳しく）得ることができましたが略して載せません。しかし、その他の国々は遠くて絶しているので詳しく得ることができませんでした。（したがって、戸数や道里は載せることができません）」。

※（）内筆者記

このことから推すると、三国志に表記した以上に様々なことを詳細に調査してあったことは確かだと思われます。

倭人からの聞きかじりだけではなさそうです。伊都国には「郡使常駐」すなわち、帯方郡からの使いが常に駐するとあります。それからしても原本の間違いなどと簡単に言うべきではないでしょう。しばらく滞在していれば、どちらから太陽が昇り、どちらへ沈むか位はわかるでしょう。

九州地方の地図を出して、唐津にコンパスを立て、対馬の北端まで広げて、そのまま円を画いてみて、ぶつかる名所旧跡があれば、誰でも容易に邪馬壹国の「女王の都」に辿り着く事ができます。

7. 邪馬壹国の方位と里数

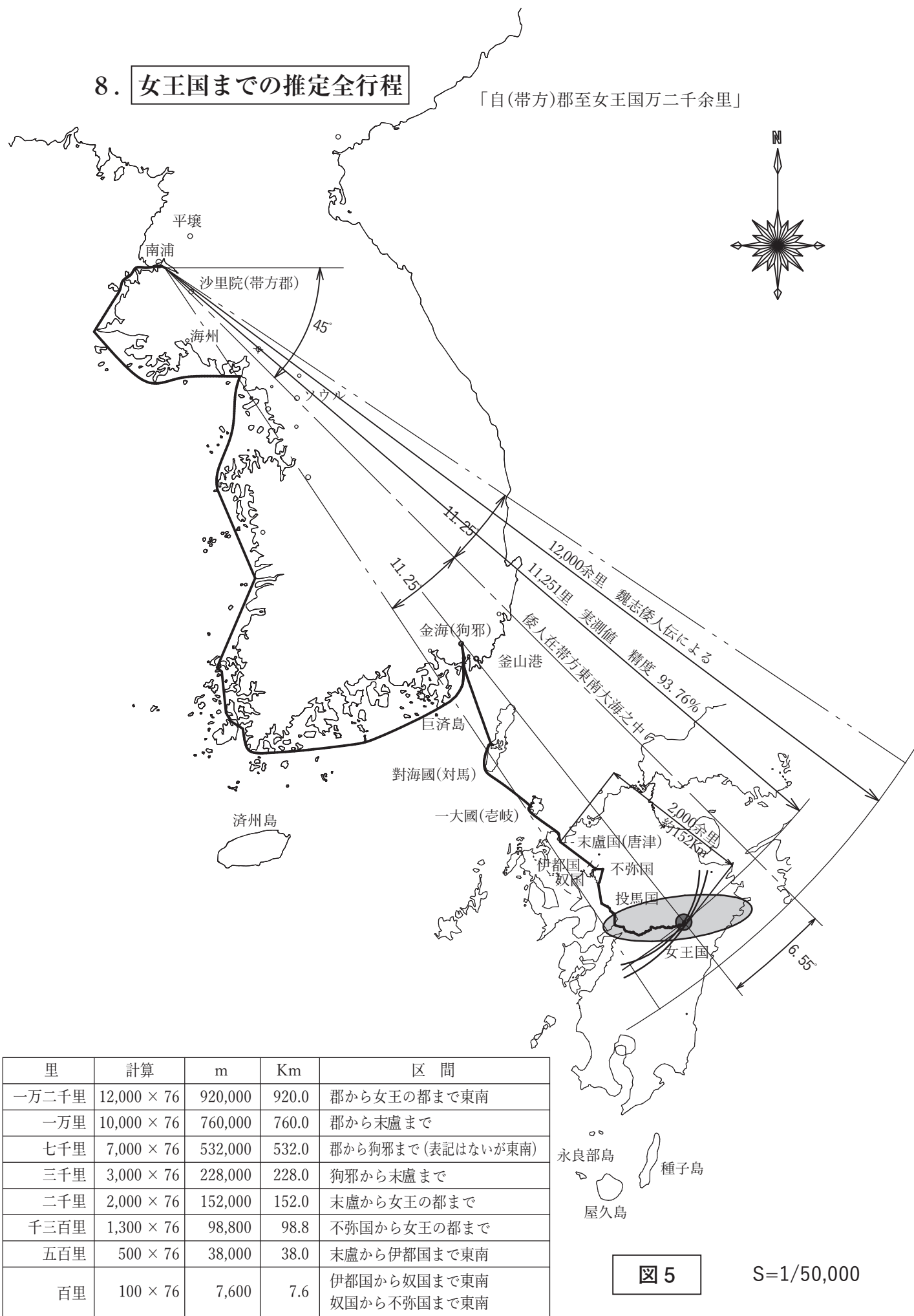
邪馬壹国の位置を探るために『三国志』の中の「邪馬壹国、女王の都」に関する文言を拾い出し、その概要を示してみます。方位は『三国志』のままとし、距離は「影寸千里」の法から求めた千里 = 76Km とします。

「邪馬壹国女王之所都」の周辺状況とポイント

No.	項目	内容
①	末盧国から 2,000 余里	「自郡至女王国万二千余里」郡から末盧国までは 10,000 余里なので、差し引き末盧国から女王国までは 2,000 余里になる。
②	不弥国からは、1,300 余里	末盧国から不弥国までは 700 里なので、残りは 2,000 余里 - 700 里 = 1,300 余里になる。
	余里について	最小表記が 100 里なので、50 里四捨五入と考え、前後 50 里の余距離を含むものとした。
	方位について	「東南」の表記より 8 方位と考え、各々 ± 22.5° の許容範囲としましたが、さらに精度がよいようなのでその半分にしました。
	周辺の国々	「自女王国以北其戸数道里可得略載其余傍国遠絶不可得詳」より、
	女王国の北側の国	対海国 一大国 末盧国 伊都国 奴国 不弥国 投馬国の計 7 箇国
	女王国と女王の都	女王国は邪馬壹国、女王の都は邪馬壹国の中
③	それ以外の遠く絶している国 (女王国に属している)	斯馬国 已百支国 伊那国 都支国 弥奴国 好古都国 不呼国 姐奴国 対蘇国 蘇奴国 呼邑国 華奴蘇奴国 鬼国 為吾国 鬼奴国 邪馬国 躬臣国 巴利国 支惟国 烏奴国 奴国の計 21 箇国
④	倭国内で女王国に属さない国	狗奴国の 1 箇国 男王卑弥弓呼 注) 拘奴国ではない
⑤	投馬国から南へ水行	邪馬壹国は投馬国の南にあり、水行 10 日と陸行 1 月掛った。
⑥	東の海を渡ると倭種の国	邪馬壹国の東渡海千余里複有国皆倭種 後漢書には拘奴国で女王に属していないとある。 注) 狗奴国ではない
⑦	海を南に行くと侏儒国がある	侏儒国在其南・・・去女王 4,000 余里 有裸国黒齒国復在其東南船行 1 年
⑧	倭地は海中の州島で周五千余里	倭地絶在海中洲嶋之上或絶或連周旋可五千余里
	卑弥呼の死	大作塚径 100 余歩殉葬者奴婢 100 余人 立男王国中不服・・・立卑弥呼宗女壹与年 13

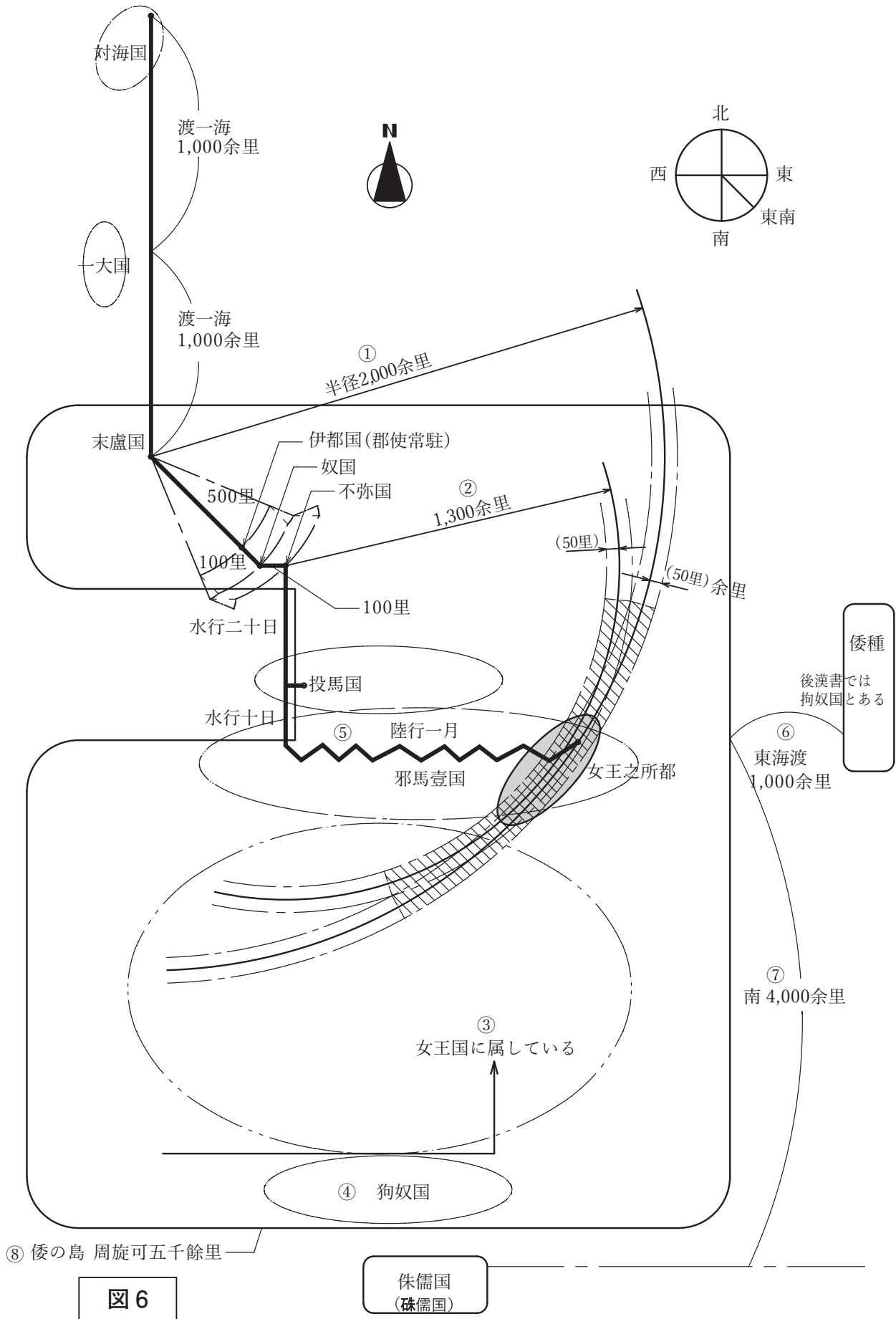
8. 女王国までの推定全行程

「自(帯方)郡至女王国万二千余里」



9. 邪馬壹国の位置イメージ

○数字はP18の一覧表のNO,を示します。



10. 邪馬壹国位置図

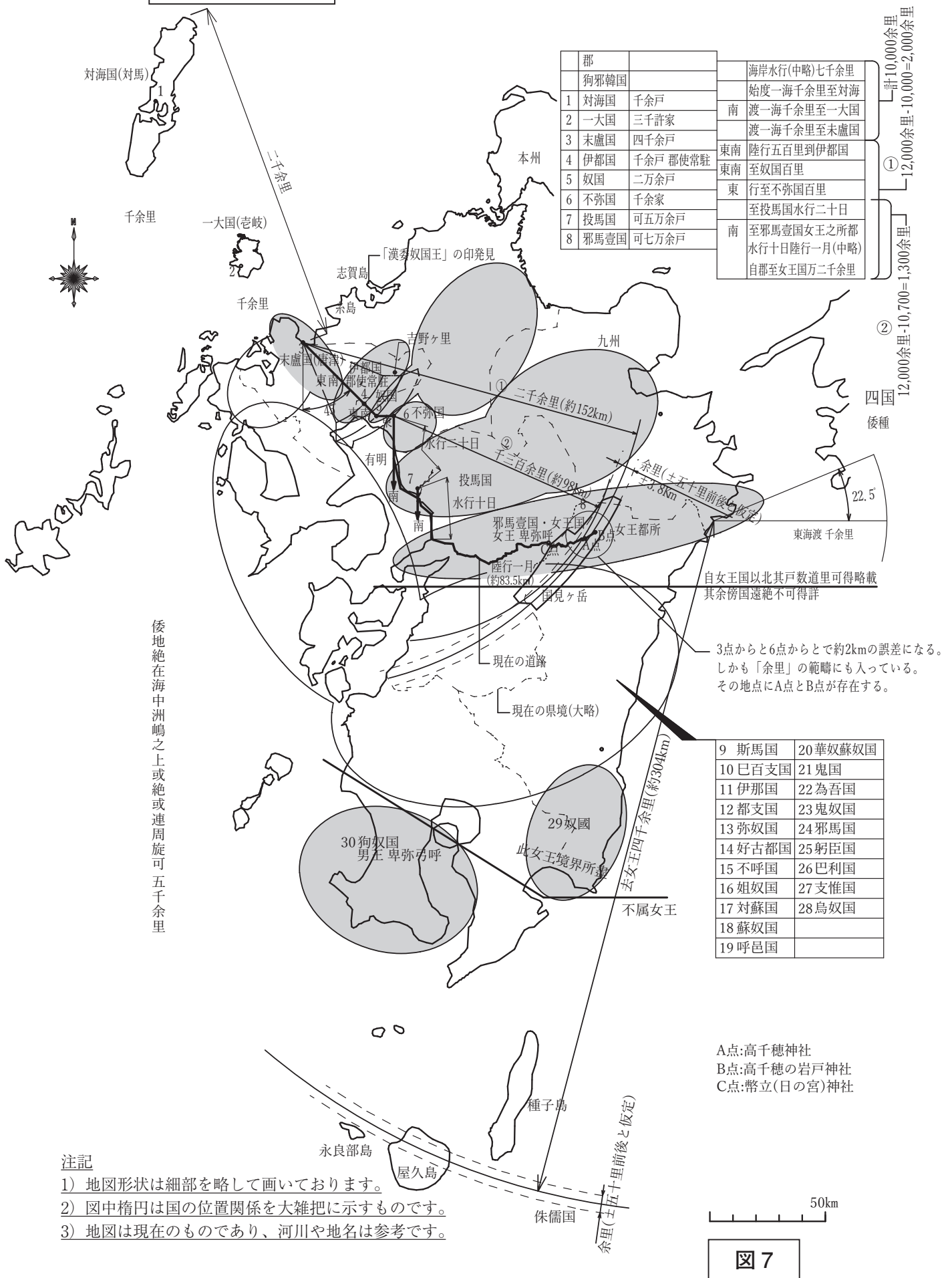
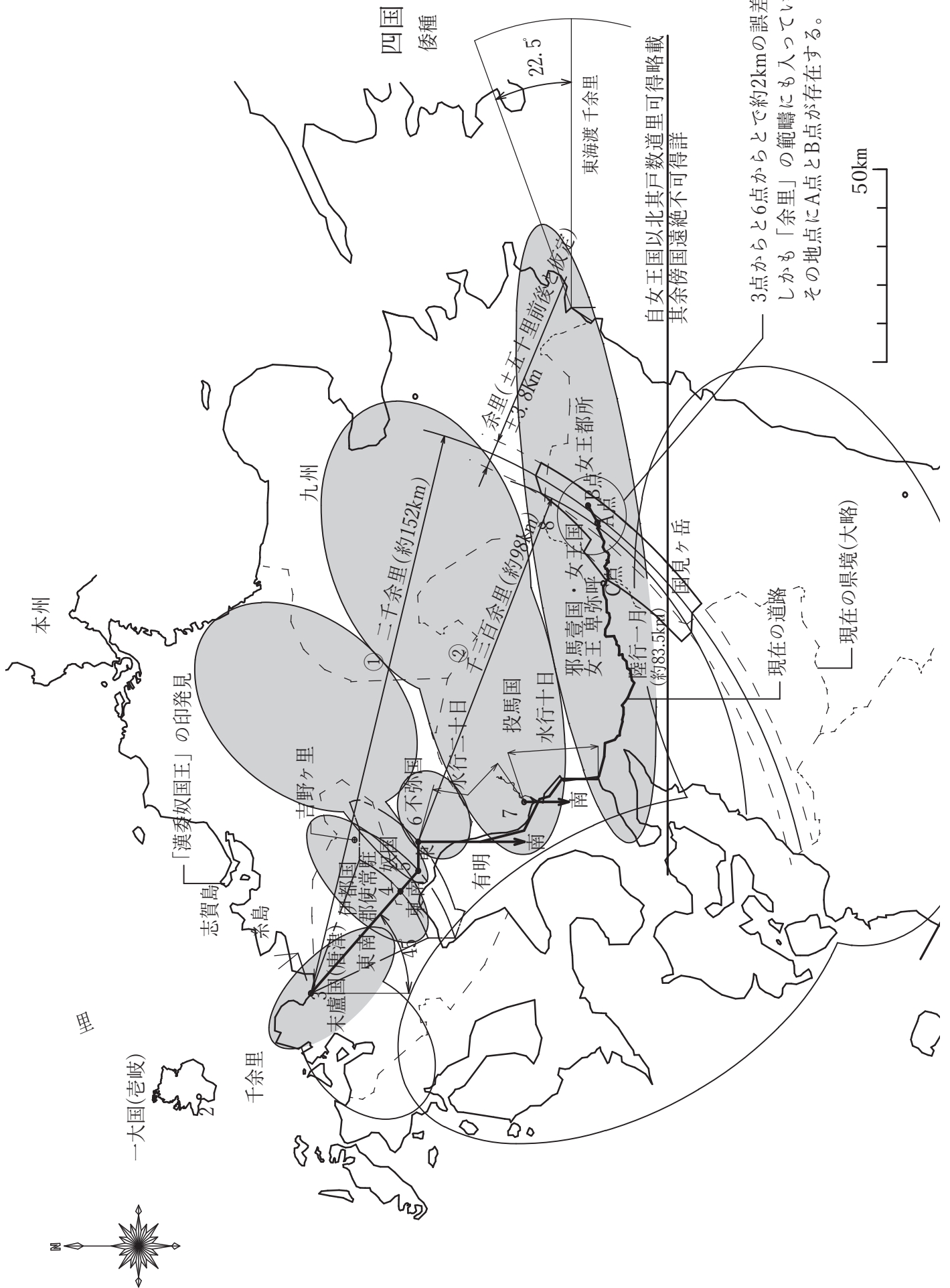


図 7

図7 拡大図



3点からと6点からとで約2kmの誤差になる。
 しかも「余里」の範疇にも入っている。
 その地点にA点とB点が存在する。

11. 伊都国の位置図

「東南陸行五百里到伊都国・・・千余戸」

伊都国の都は佐賀城址県立博物館付近

吉野ヶ里は伊都国のベットタウンか



図 8

伊都国 起着点の最大範囲

【解説】

末廬国の基点は、唐津市役所近辺とします。近くには桜場遺跡があります。本図から、伊都国の起着点を比定すると、方位と距離で佐賀城址が殆どピッタリ当てはまります。

原本に「余里」がないことから確信のほどが伺われます。

伊都国は帯方郡使が常に駐する所です。また伊都国に一大卒を置いて諸国を常に檢察しているとあります。地理的にも諸国の交差点だったと思われます。

戸数が千余です。吉野ヶ里を中心とするクニ全体の人口がおよそ 5,400 人といわれています。

一戸当たり数名の家族数を考えると当てはまります。

筑後川が伊都国と奴国の国境だったと考えられます。それが多少形状を変えながら、今日の佐賀県と福岡県の県境になってきているように思います。

伊都国行政の中心地が佐賀城址でベットタウンが吉野ヶ里遺跡と思われます。

伊都国を福岡市西区や糸島市に比定する説が殆どですが、方向は 65° 以上、距離は 100 里程度違います。又伊都国が倭国の政治の中心地であることを郡使もわかっていたのだからわざわざ末廬に上陸し、大変な思いをして十坊山を徒歩で越えなくても、船で直接着岸すればよかったです。

末廬国は「草木が盛んに茂っていて前の人を視えない」とあります。恐らく海岸通りも十坊山を越える道もなかったのではないのでしょうか。

伊都国を何とか金印出土と結び付けようとする余りに起きた取り返しの付かないミスだと思います。中国には相当の測量技術があったのですからまずは原本に忠実にやってみる事です。

12. 奴国の位置図

「東南至奴国百里・・・二万余戸」

伊都国を佐賀城址に比定して、奴国の位置を探る。

奴国の起着点は大川市大川小学校西側付近。

国は北側に広大な領域。

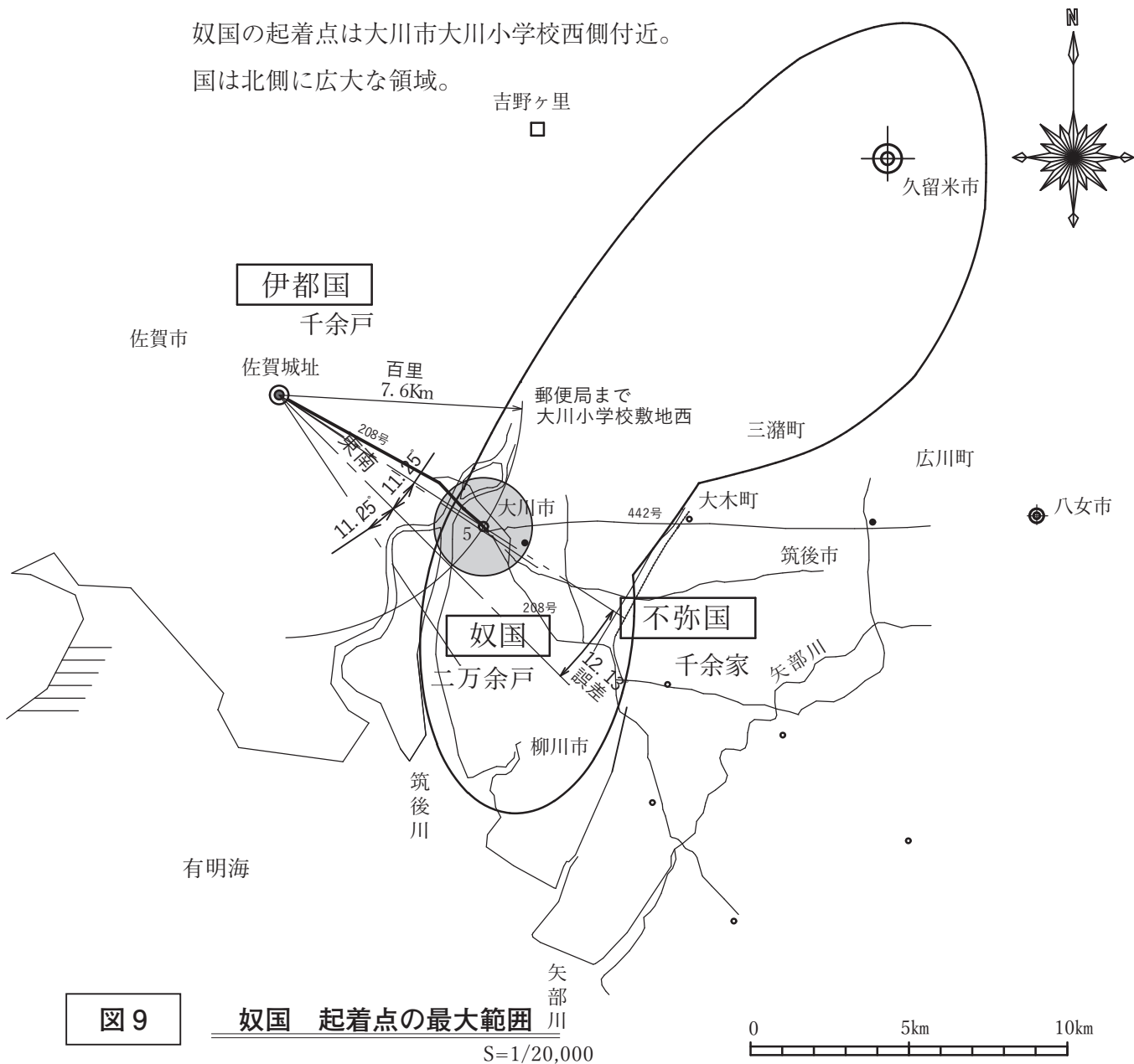


図 9

奴国 起着点の最大範囲

S=1/20,000

【解説】

佐賀城址から縄文や弥生時代の遺跡が多数出土していること、城跡（公地）であることなどからここが伊都国の起着点にふさわしいので、ここに修正します。

奴国の起着点を探ってみると、本図に示すように、大川市大川小学校西側付近になります。

原書では伊都国と奴国間の距離にも「余」の字がありません。測値の正確さを物語るものです。

国の大きさを考えると、次の不弥国まで東へ100里、家が20,000余戸となっているので奴国は北側にかなり広大な領域だったことが伺えます。

佐賀城址から大川市、次の大木町への現在のルート形状と三国志の表記「東南」、「東」が今日に残っているように思われます。

13. 不弥国の位置図

「東行至不弥国百里・千余家」

伊都国を佐賀城址に比定した時の不弥国の位置を探る。

不弥国の起着点は現大木町内。

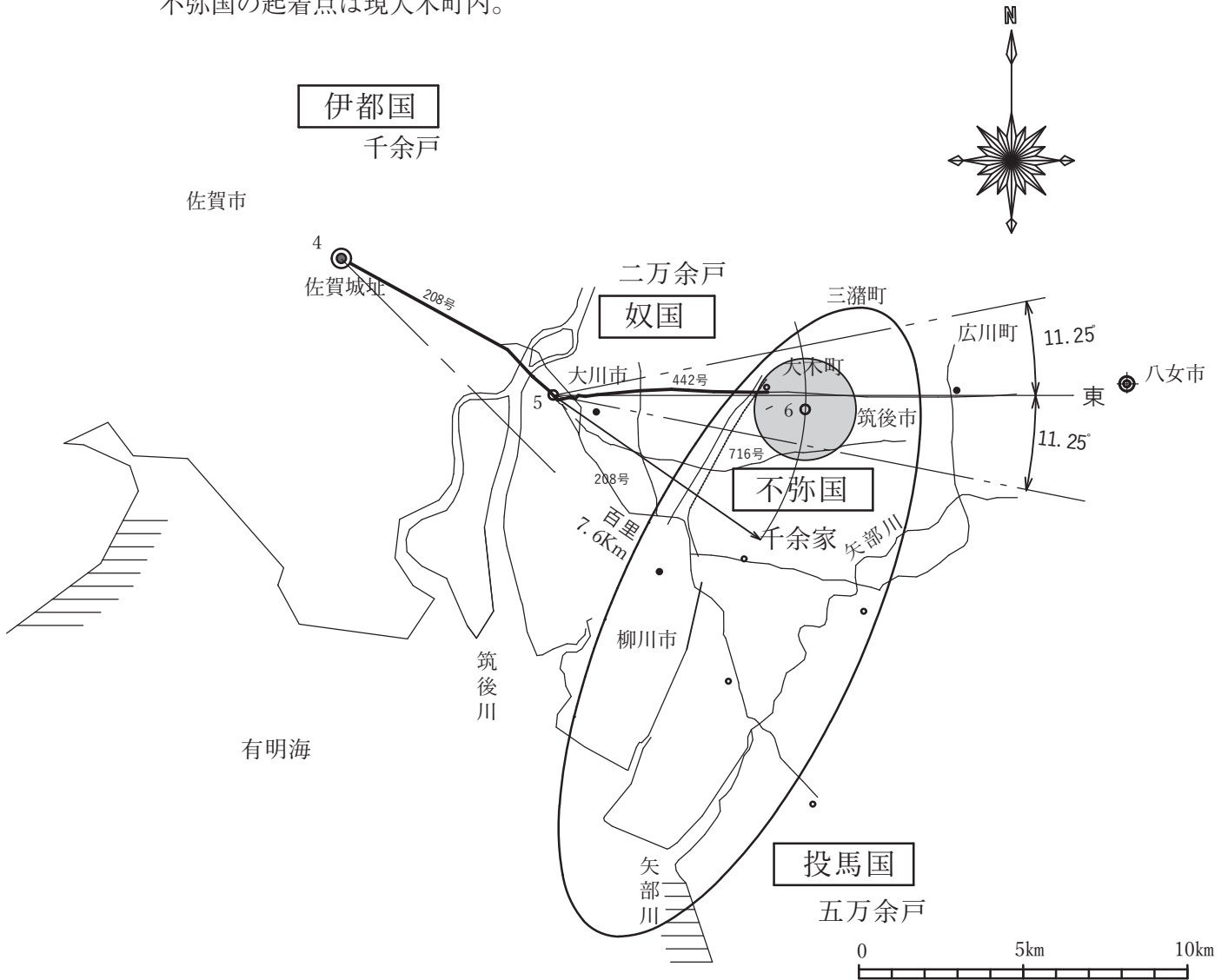


図 10 不弥国 起着点の最大範囲

S=1/20,000

【解説】

佐賀城址を伊都国の起着点とすると、本図に示すように、方向と距離から不弥国の起着点は大木町の高良玉垂命神社付近が当てはまります。伊能図には役場前の442号線はありません。716号線でも誤差範囲になります。その場合は三島神社付近になります。

原書では奴国と不弥国間の距離にも「余」の字がありません。

不弥国は1,000余戸と集落が少ないので、規模が小さな国だったと考えられます。

北は筑紫市から南は大和町の矢部川河口までが含まれるようです。

このあたりの水路は「南至投馬国水行」がピッタリ当てはまると思われます。

14. 投馬国の位置図

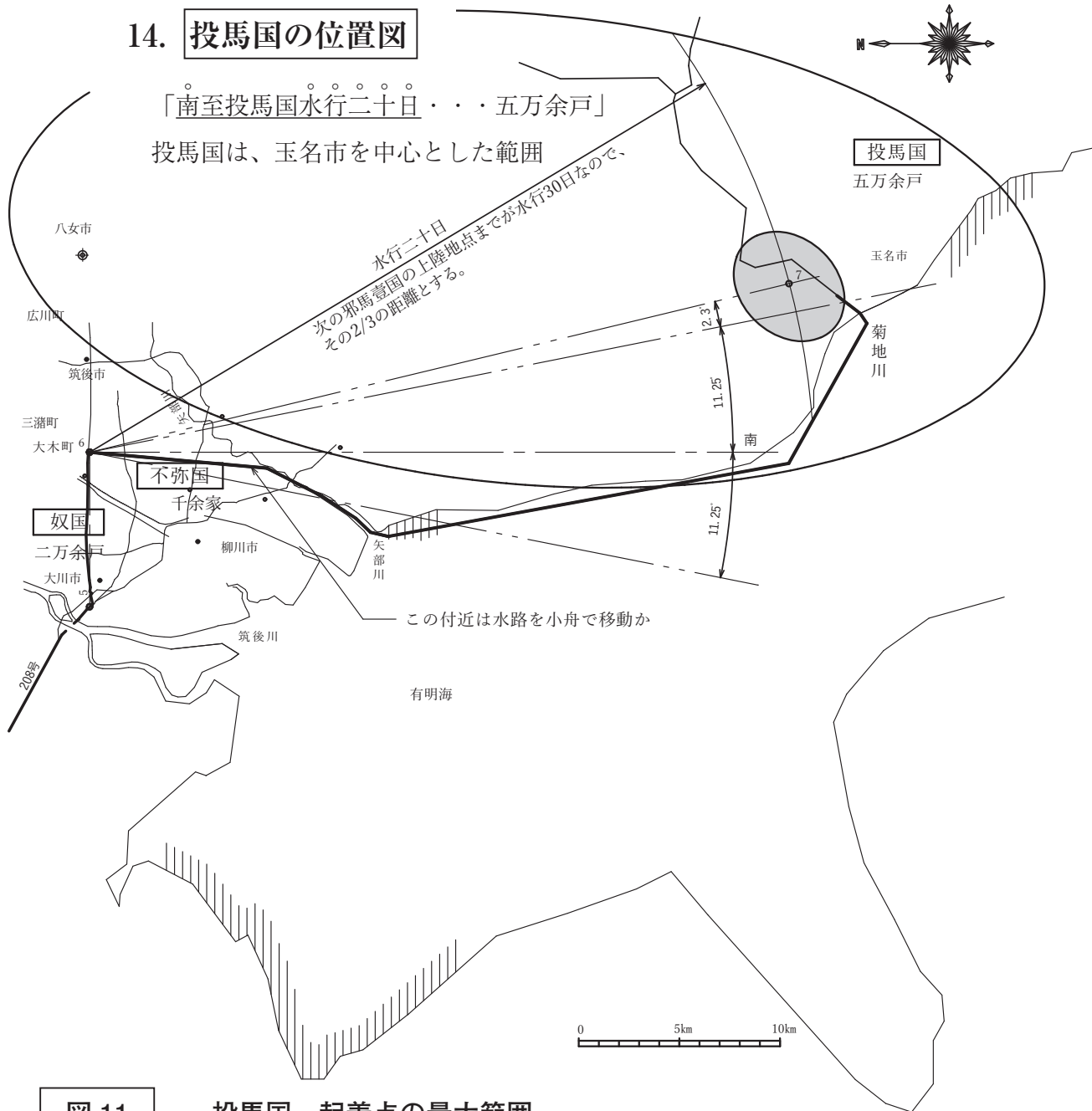


図 11

投馬国 起着点の最大範囲

【解説】

不弥国から投馬国へは、多くの水路や海岸線（水行）を行くしかありません。

次頁から女王之都の位置がわかるので、そこまでの陸行のルートを探ります。

上陸地点は、緑川河口付近に推定します。

次の「陸行一ヶ月」と女王之都までの方向を考えると宇土半島を越えることはありません。

不弥国から緑川河口付近までが水行、計三十日になるので、その三分の二来た近辺が投馬国の起着点になります。丁度、菊地川河口の玉名市にピッタリ符合します。

この地図を見ると里数表記でなく日数表記にした謎が解けると思います。

里数を述べても状況によって目的地に到着するまで日数にかなりの差がでるのであまり意味がありません。それより少し余裕を持たせた日数表記の方が旅程の困難さも伝わるのではないのでしょうか。

また、およそ1800年前の柳川の地形が現在に近い（海岸線が二、三キロ入り込む程度）もので、しかも柳川に掛る橋が無かったとしたら、小舟の方が便利だったのではないのでしょうか。

伊都国からの放射状説がありますが、三国志には「自女王国以北其戸数道里可得略載」とあり投馬国もその中にあるので矛盾します。放射状説は成り立ちません。「以北其」を見落としたと思います。投馬国は女王国の北側です。

15. 邪馬壹国・女王之都の位置図

「南邪馬壹国女王之所都水行十日陸行一月・・・七万余戸」

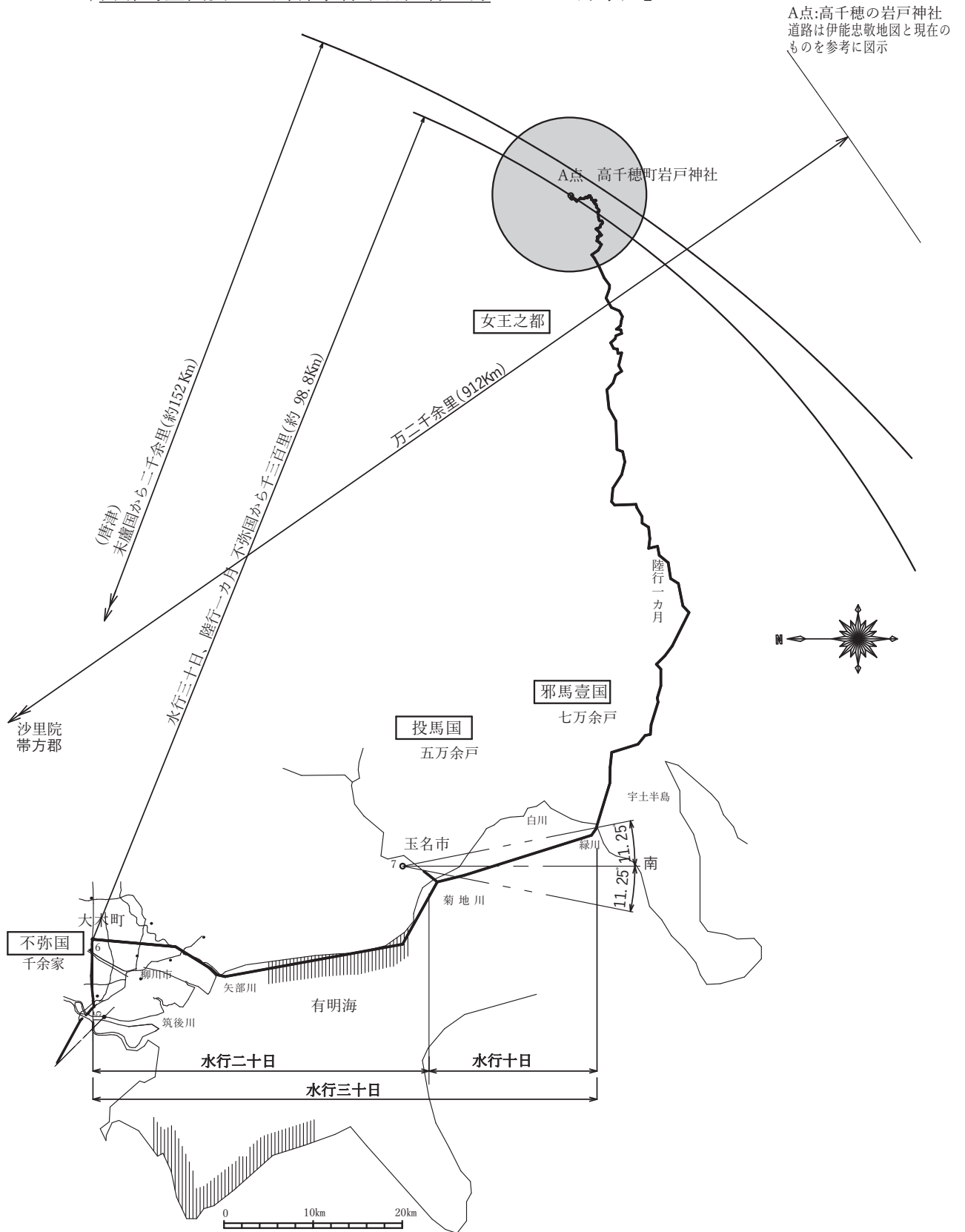


図 12 邪馬壹国・女王之都の位置図

図 12 【解説】

邪馬壹国は投馬国の南側にあります。

邪馬壹国の西側は海岸線（水行）です。

末廬国から、女王国（之都）まで 2,000 余里（約 152Km）です。

不弥国から女王之都までは、1,300 里（98.8Km）になります。

国の東側は海で東に千余里渡ると倭種の国があります。

（距離と方向で四国がピッタリ）

また国の南 4,000 余里に侏儒国があります。（距離と方向で屋久島がピッタリ）

これらの条件を満たすような位置が、女王の都になります。

不思議なことに高千穂の岩戸神社が距離でほとんどピッタリです。

上陸地点がもっと南に行かないかという疑義があるかもしれませんがそれは図からも明らかのようにありません。郡からの測定より国内での測定の方が誤差が小さいので、12,000 里をそのまま用いるより、末廬国からの 2,000 里や不弥国からの 1,300 里を用いるべきと思います。

二つの円弧の最接近付近が女王の都になります。

16. その他の比定地

帯方郡から末廬国まで

帯方郡の所在地確定については、幾つかの説があります。ソウル近郊の説もありますが、逆に唐津からも、女王の都からも又金海からも三国志の里数と全く符合しません。東西方向の距離を読むとき方角が数度ずれていることを先に検証しましたが、これを考慮して唐津と女王の都と金海から郡までの里数を円弧で画くと、大同江のそそぐ大きな入江の南岸付近になります。近くに古都沙里院があります。

楽浪郡（平壤近郊）と比較的近くに在りますが、ここが帯方郡の中心地だったのではないのでしょうか。隋書に「古伝承では楽浪郡の境及び帯方郡から一万二千里」とあり符合しています。距離的には近くの安岳郡も候補地になります。広州説は距離が合いません。

狗那韓国については、蔚山から釜山、金海までの範囲になりますが、釜山港は比較的新しい港であることと、方角測定誤差がピッタリであることから古の都伽耶、現在の金海市が符合します。

対海国は対馬、一大国は壱岐、末廬国の起着点は唐津でよいと思います。

金海市から唐津までの距離が数百メートルの誤差で符合します。

唐津市役所近辺には桜場遺跡があります。次の伊都国と思われる佐賀城址には方角も距離も殆どピッタリです。

狗那韓国と末盧間は計三千余里になりますが、特に一大国と末盧間に大きな誤差があります。三千里を単純に三等分したように思えます。

ちなみに唐津をコンパスの中心にして対馬の北端までを半径とし円を画くとその線上付近に邪馬壹国の女王の都があることとなります。ピッタリ高千穂の岩戸神社にぶつかります。

「女王国東渡海千餘里復有国皆倭種」は四国

ここは、「女王之所都」ではなく「女王国」となっています。その東には、千余里海を渡って倭種の国があるとあります。

宮崎県側の北浦町あたりから四国の宿毛湾あたりまでは丁度千里になります。方位も誤差の範疇で東になり、ピッタリです。

女王国の東に四国があるというのです。邪馬壹国の位置を特定するために大変重要な部分です。

後漢書では「拘奴国^{注)}」になっています。注) 狗ではない

宮崎県側の北浦町には弥生時代の中野内遺跡があります。

四国側の宿毛市宿毛貝塚は縄文後期の遺跡で土器、石器、人骨等出土しています。

「侏儒国在其南（中略）去女王四千余里」は種子島、屋久島、永良部島

ここは、「去女王」となっています。方位と里数からピッタリ屋久島に到着します。種子島、永良部島を含めたのが「侏儒国」だと思います。

屋久島の横峰遺跡、一湊松山遺跡、種子島の奥ノ仁田遺跡など縄文中後期の遺構が見つかっています。

「裸国黒齒国復在其東南船行一年可至」は小笠原諸島

「裸国黒齒国」は方位からは沖縄ではなく、小笠原諸島に符合します。

父島の大根山遺跡、北硫黄島の石野遺跡、母島から土器や石器、貝製品などが多数見つかり、有史以前から人が居住していたことがわかっています。

結論

末盧国からも、不弥国からも三国志の「邪馬壹国」の「女王之所都」は高千穂になります。距離も方位も岩戸神社なら誤差の範疇です。

「邪馬壹国」が高千穂というより、「女王之都」が高千穂なのです。

高千穂については全く予備知識がありませんでした。機械的あるいは測量的に進めて行った結果、自然に辿り着いた所が、高千穂だったのです。

邪馬壹国は、西は熊本市から東は宮崎県延岡までの大きな国だったようです。

卑弥呼と天照大神が高千穂で結ばれたのですから、日本書紀と古事記を再考する必要があります。 (日本書紀や古事記をそのまま史実とは思いませんが) 卑弥呼は日神子あるいは日の巫女であり、日の神である天照と同一人物に見えます。

雰囲気などから同一人物ではないかとの見方をする方や紀記に示された天皇の在位期間の修正からこの説を述べられている方もいます。

もし、そうであるなら「筑紫の日向の高千穂」の解釈もそのまま正しいとなり、幣立神社の由緒因縁などの伝承も正しいかもしれません。

三国志にあるのは確かに「邪馬壹 (一) 国」です。それから数百年後にまとめられた隋書には「邪靡堆、魏志の説に則れば邪馬臺 (台)」とあり、三国志の魏志倭人伝には「邪馬臺 (台) 国」となっていると書かれていますが、三国志の原本は「壹 (一)」なのです。隋書の段階で間違っただけは確かです。背景には隋書をまとめた頃の倭国の政治状況の変化による新旧呼称の変化があるように思えます。邪馬壹が後に場所も移して邪馬台になり後に大和になったとしても、少なくとも三国志に記された邪馬壹国女王の都は高千穂であることは間違いありません。

17. 参考資料

海島算経図解

『海島算経』は、2世紀頃にできた測量に関する算術を問答形式でまとめたものです。測定方法と数値が書かれていて、島までの距離と高さを求めよとの問があります。

続いて、答へのプロセスが書かれていますが、数式は書かれていません。

数問ありますが、必要な一問のみ解釈を試みることにします。

【島の山までの水平距離と山の高さを求める】

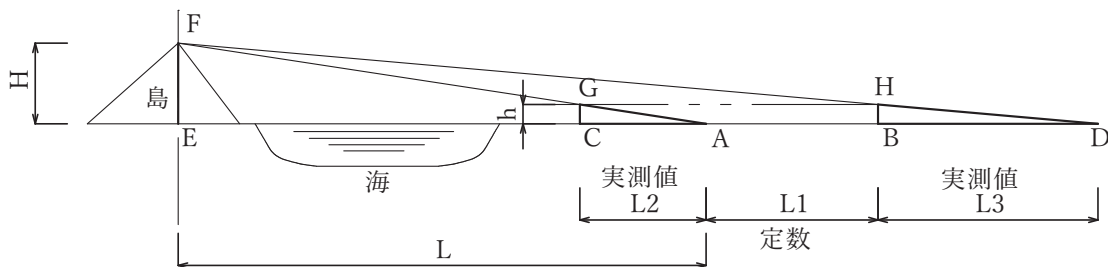


図 1 3

$$\triangle ACG \sim \triangle AEF$$

$$h:H=L_2:L$$

$$H=h \times L/L_2$$

$$\triangle DBH \sim \triangle DEF$$

$$h:H=L_3:(L+L_1+L_3)$$

$$H=h \times (L+L_1+L_3)/L_3$$

$$L_1: 1,000 \text{ 歩}$$

$$L_2: 123 \text{ 歩}$$

$$L_3: 127 \text{ 歩}$$

$$h: \text{齋(棒)3丈}$$

$$=5 \text{ 歩}$$

$$L/L_2=(L+L_1+L_3)/L_3$$

$$h \times L/L_2 = h \times (L+L_1+L_3)/L_3$$

$$L = L_2 \times (L+L_1+L_3)/L_3$$

$$L = (L_2 \times L + L_2 \times L_1 + L_2 \times L_3)/L_3$$

$$L = (L_2 \times L/L_3) + (L_2 \times L_1 + L_2 \times L_3)/L_3$$

$$L - (L_2 \times L/L_3) = (L_2 \times L_1 + L_2 \times L_3)/L_3$$

$$L \times (1 - L_2/L_3) = (L_2 \times L_1 + L_2 \times L_3)/L_3$$

$$L = (L_2 \times L_1 + L_2 \times L_3)/L_3 \times (1 - L_2/L_3)$$

$$L = L_2 \times (L_1 + L_3)/L_3 \times (1 - L_2/L_3)$$

$$L = L_2 \times (L_1 + L_3)/L_3 - L_2$$

$$L = \frac{L_2 \times (L_1 + L_3)}{L_3 - L_2}$$

$$= 34,655 \text{ 歩}$$

$$H = \frac{h \times L}{L_2}$$

$$= 1,409 \text{ 歩}$$

答えの比較

	水平距離(歩)	山の高さ(歩)
海島算経の答え	30,750	1,255
上記式の答え	34,655	1,409
CADによる図解	34,655	1,409

『1歩=6尺

10尺=1丈』

これは孫子算経に記されている。図中のhは何歩かを求める。従って3丈=30尺である。又、6尺=1歩なので30尺(=3丈)は5歩となる。

海島算経にある山までの水平距離「百二里百五十歩」は1里=300歩なので102 × 300 = 30,600歩となる。30,600 + 150 = 30,750歩となる。

又「山高4里55歩」は1里300歩なので山の高さ4里55歩は1,255歩になる。ただし、次下に記したようこの答えは間違っている。

※ 海島算経の誤り

$$L = \frac{L_2 \times (L_1 + L_3)}{L_3 - L_2}$$

※ このL3を取ると海島算経と同じ答えになる

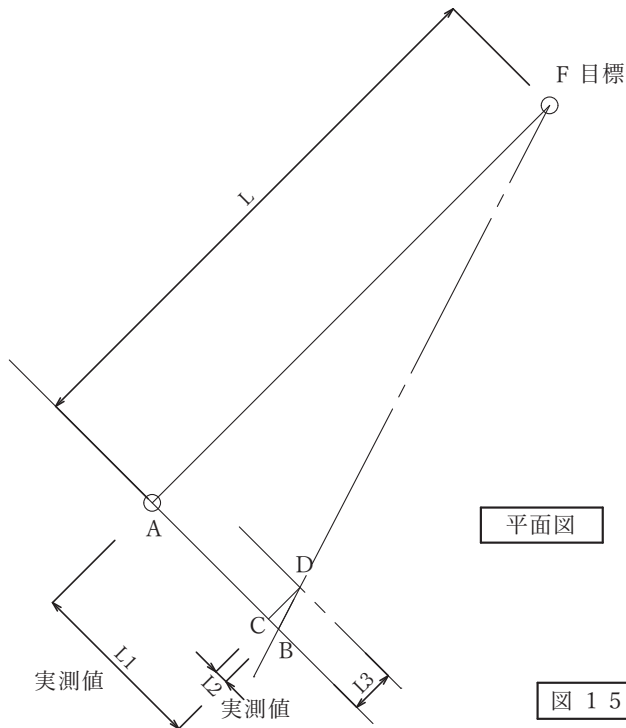
L3を入れると、正しい答えになる。

当初、計算上の誤差と考えていたが、キャドで図解してみると、算経の間違ひであることが分かった。大震災があったので再チェックまで1年半掛った。

海島算経応用の測定方法（1）

近距離を求める（三角形の相似）

より簡単なこの方法は、当然の存在と考えられます。



1. A点に小杭を打つ
2. A点と目標のF点に向かって一定の長さの紐を張る。
3. A点を起点にその線と90°のラインを引く。
4. そのライン上をL1進んで小杭を打つ。(B点)
3. B点から目標Fに向かって一定の長さの紐を張る。
4. 基線ABと任意の距離(L3)の平行な線を引く。
5. D点から基線に垂線を引き、C点に小杭を打つ。
6. C点とB点の距離(L2)を測る。

求めたL1,L2,L3を次の式に入れる。

$$L = \frac{L1 \times L3}{L2}$$

コメント

伊都国と奴国、不弥国間はこの方法が考えられます。
 5Km先を測るのに、100m × 50m 程のスペースが必要です。
 近距離測定には歩測や紐（縄）尺も考えられますが、直線距離の測定は案外困難です。
 慣れれば図示方法の方が確かです。

海島算経応用の測定方法（2）

近距離だが、向こうが見えない場合の算定方法で、海島算経の知識力以下なので、同様のことは十分できたものと思われる。

平面的な角度（ θ ）の表示はなかったが、タンジェント、相似の考えがあったので、現代使用している θ に置換した。（倭国は弥生時代）

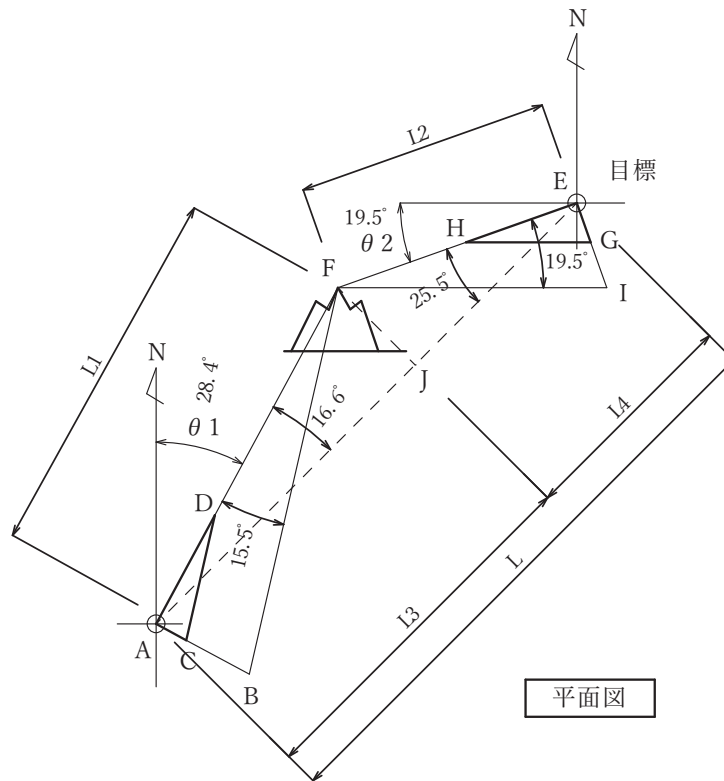


図 1 6

1. 三角形ACDとABFが相似、三角形EGHとEIFが相似。
2. A点とE点に方位を入れる。
3. A点とE点からの山の方角を入れる。
4. L1とL2を算出する。
5. A点とE点と山を図示し、三角形AJFと三角形EJFからL3とL4を算出する。

コメント

不弥国と投馬国間や投馬国と女王の都間は、この方法が考えられます。

海島算経応用の測定方法（3）

海島算経の応用編で、リアス式の岸壁側を船や島から測る。

いくつかの方法が考えられるが、比較的容易なものを想定してみる。

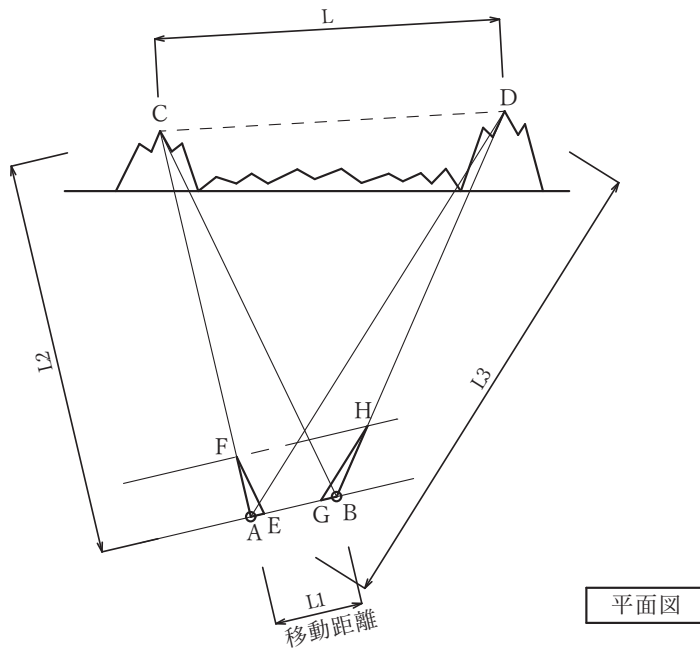


図 17

1. 三角形ABCとAEFが相似、三角形ABDとGBDが相似。
2. あらかじめA点とB点を決定しておく。A点からC点とD点を望み、B点に移動する。B点からもC点とD点を望む。交点がCとD点になる。
3. 以上を図示し、三角形の相似の比率からLを求める。(図解法)
細かい計算法もあるが、図解法の方が容易である。

コメント

いわゆる、三角法の原理に則った三角測量です。紀元前 150 年のギリシャですでに、用いられていたといわれています。

狗邪韓国の沿岸はこの方法が考えられます。

又、不弥国と投馬国間や投馬国と邪馬壹国上陸地間もこの方法が考えられます。海島算経に記された測量の原理を基に、考えられる幾つかの測量方法を検討しました。

これと、当時用いられていた周髀算経の方角の出し方や影の差による区間距離の算定法と、海島算経の本家ともいえる、数書九章の句股の原理等々の存在をみると、驚くばかりです。いわゆる長里で太平洋の中とか、南を東に誤記したとか、邪馬壹国が近畿地方であるとか、北九州であるとか、いかに的外れであるかがわかります。

歩の検証

(海島算経から1歩は25.05cm)

前2世紀頃表された『周髀算経』には、「去北極九十一度六百一十里二百六十四歩千四百六十一分歩之千二百九十六」の記載があり、歩の単位の存在はわかりますが、歩と里の関係はわかりません。

1世紀頃まとめられたといわれる『数書九章』にも、田の一辺の長さとして歩が出てきますが、里との関係までは書かれていません。

2世紀頃編集された、『海島算経』に次のような一文があります。

「一千九百七十一尺七分尺之三以里尺法除之得一里不盡以歩尺除之得二十八歩不盡三還以七因之得数内子三得二十四復置歩尺法以分母七乘之得四十二為歩法俱半之副置平約等数即是千山去前表一里二十八歩七分歩之四也」

すなわち、 $1,971\frac{3}{7}$ 尺 = 1里 $28\frac{4}{7}$ 歩になるということです。

1里を300歩として尺と歩の関係を確認してみると、

(1里300歩 = 76.808m から1歩は25.60cm)

すなわち、 $1,971\frac{3}{7}$ 尺 = $328\frac{4}{7}$ 歩 (よって1尺は $25.6/6 = 4.26$ cm になる)

(又1寸は $4.26/10 = 0.426$ cm になる)

1歩 = $1,971\frac{3}{7} / 328\frac{4}{7} = 6$ 尺 になります。

春秋時代(紀元前770～403年)のことを4～5世紀頃にまとめた『孫子算経』には明確に「一歩六尺、一里三百歩」とありますが、2世紀も同じだったことが明確になりました。ただし、紀元前2世紀頃のものを後にまとめたといわれる『周髀算経』では一歩八尺としています。

尾張川邊百彌信一著『周髀算経図解 貳』に「周は八尺を一歩とし三百歩を一里とす。秦漢以来は六尺を一歩とし、三百歩を一里とす。」とあります。

卑弥呼の墓

三国志に卑弥呼の墓が「大作塚径百余歩殉葬者奴婢百余人」とありますが、別項で述べたように1里が約76mであると共に、1里が300歩なので、1歩は $76/300=0.253\text{m}$ になります。従って卑弥呼の墓は、直径約25.3m、周長約80mの弥生墳丘墓だったようです。

「大塚」にしては同時代の他の塚に比べてもさほど大きくはないと思えます。又殉葬者百人を仮に塚の周囲に埋葬したのであれば、立錐の余地はないので、符合はします。

「径百余歩」という言い方は、算経等からしても計測単位としての「歩」であり、歩巾1歩という伊能忠敬式歩測の「歩」ではなく、成人男性の足の寸法（1足のことのように思います。辞典（旺文社 漢和辞典）を見てみると、1～3世紀頃までの中国の1歩は1.3824mと出ています。又1里は414.42mとなっています。出典は書かれていません。約5.5倍です。逆に、それらは「1寸1,000里の法」に大いに矛盾することになります。

少なくとも、三国志の倭人の条は、1,000里を約76Kmとしています。

従って、くどいようですが百余歩は約25.3mとなります。

現存するなら、高千穂の、或いはその近辺の、弥生後期の墳丘墓が卑弥呼の墓の可能性が大です。幣立神社を日の宮とも、元伊勢というのも伝承とともに気になります。

現存するなら、というのは、もし紀記にある天皇の年代が詳しく解るようなことがあり、仮に卑弥呼が天照大神だったら、元伊勢といわれる日の宮（幣立神社）や伊勢神社の存在との関係性で墓所が、今日まで残っているだろうか、という意味です。

ともかく、考古学に期待しましょう。

雑記

三国志(影印南宗紹熙刊本)の「倭人傳」の章の中で「邪馬壹国」の固有名詞はたった一箇所しかありません。しかも「邪馬臺(台)国」ではなく「邪馬壹(=壹=一)国」になっています。厳密には古田武彦氏の言われた通りです。「邪馬台国」などは存在しません。

三国志のたった一か所の「邪馬壹国」のために多くの人は何百年も真剣な論議を重ねて来ているのです。

最近でも奈良の纏向遺跡で住居跡が見つかるやNHKでさえトップニュースで「邪馬台国の卑弥呼の住居跡か」と報じたのです。

残念ながらこの論争は長く続くでしょう。

私にとって数十年のロマンであったように、何がどうであれ永遠に続く一人一人のロマンの旅なのかもしれません。

そういった意味では、いまさら・・・「邪馬台国」でもよいのかもしれませんが。

しかし、くしくも天孫降臨の地で記紀にある「筑紫の日向の高千穂の久志布流多気」が邪馬台(壹)国の女王卑弥呼の都だったことは間違いありません。各所に示したように、少々の誤差などまったく問題になりません。北部九州も況や近畿地方にも、どのように測量しても行き着きません。

邪馬台（壹）国の争点 他説との比較

争点項目	他説と自説	
A 原本の信ぴょう性		
1. 三国志の信ぴょう性	他	歴史書は勝者によって修正されるので信ぴょう性がない。
	自	仮に僅かの誤記があったとしても、まずは原書のまま行くべき。
2. 邪馬台国なのか邪馬壹国なのか	自	三国志原本は邪馬臺（台）国でなく邪馬壹（一）国です。後年の隋書に邪馬臺（台）国あるが「魏志の説に則れば」とあり矛盾している。
3. 宗女は台与なのか壹与なのか	他	邪馬壹（一）でなく邪馬臺（台）なので卑弥呼の宗所も壹与でなく臺与だという説が多い。
	自	原本はあくまで壹与である。
B 方角と距離関係		
1. 帯方郡はどこ	他	沙里院とかソウル近郊とか幾つかの説があり確定していない。
	自	狗邪韓国を比定して逆に距離からすると沙里院か安岳郡になる。 P19 参
2. 狗邪韓国はどこ	他	釜山港、巨濟島など幾つかの説があるが確定していない。
	自	唐津から 3,000 里、沙里院の北から仮に東南のラインを引くと金海市になる。 P19 参
3. 伊都国はどこなのか	他	糸半島、怡土の地名と金印出土を念頭にした方向誤認説があり、福岡方面に比定。九州説でも近畿説でも殆ど共通の見解。
	自	原本通りで方向距離共、佐賀城址にピッタリ。郡使常駐や一大率がいたのは佐賀城址だと考えられる。末盧国へも奴国へも不弥国へも南の投馬国へもここを中心として行ける。いわば倭の国の交差点となっている。諸国檢察には絶好の位置である。糸半島、怡土の地は倭国の中心ではない。諸国檢察には適していない。現伊都市なら松浦港に着岸しないで対馬から直接糸島に来た方が便利だったはず。 P23 参
4. 奴国はどこなのか	他	伊都国からの放射状説で福岡市近郊に比定が多い。
	自	原本通りで方向距離から、大川市大川小学校西側付近。 P24 参
5. 不弥国はどこなのか	他	色々な説があるが有力比定地はない。
	自	原本通りで方向距離から、大木町高良玉垂神社付近。 P25 参
6. 投馬国はどこなのか	他	色々な説があるが有力比定地はない。
	自	原本通りで方向日数から、玉名市付近。 P26 参

争点項目	他説と自説	
7. ヤマタイ国はどこなのか	他	<p>原本は邪馬一国だが邪馬台国が一般化している。九州、畿内は元より太平洋中、海外説等々多数あるが、決定打に欠ける。</p>
	自	<p>投馬国の南にある。郡から一万二千里東南、唐津から二千里、不弥国から約千三百里、南は水行三十日、どちらかに陸行で一月、西に渡海千余里で倭種、南に四千余里で侏儒国。邪馬壹国は、西は熊本市から東は宮崎県延岡までの大国。首都は高千穂。原本通り。 P23 参</p>
8. 唐津からの方角は本当に誤記か	他	<p>唐津からは方向誤認がある。として福岡方面に進むのが殆どで、疑う者は少ない。</p>
	自	<p>誤記はない、原書のまま。 P21 参</p>
9. 伊都国からは本当に放射線状か	自	<p>放射状説では投馬国が邪馬壹国の南になってしまう。文面からは北側にあるはずなので、符合しない。文法的にも放射状でなくても成り立つ。 P21 参</p>
10. 千里は何キロメートルか	他	<p>長里短里の説あり。近年科学的論理的に谷本氏が千里は76Km 前後と解明される。</p>
	自	<p>遅れて影倍率から76Km と解明。九州説以外は全て不成立を知るべき。 P4 ~参</p>
11. 表記の里数は正しいのか	他	<p>全て根拠なしという説がほとんど。</p>
	自	<p>7,000 余里、12,000 余里は多少の誤差あるが方角共正しい。当時の測量技術を紹介する。方角も里数も誤差はあっても間違いはない。従って全て解明できた。</p>
12. 水行十日陸行一月の表記は正しいのか	他	<p>原本は全て根拠なしとの説。或いは一月は一日という説もある。</p>
	自	<p>多少余裕はあるが、正しい。この間は距離の表記より日数表記が符合。 舟は弥生時代の倭舟、陸は草木繁茂し、山河溪谷橋もなし荷を持ち列をなし一日何キロ進めるか。トレッキング初心者なら分ると思う。</p>
13. 畿内説	他	<p>三国志の距離、方位、名称（三国志には邪馬壹国とあるが邪馬台国の誤字という）全て間違いとする説。古くは新井白石に始まる。</p>
	自	<p>以前は三角縁神獸鏡多数発見が最有力裏付けだったが百枚を超えてしまったのと国内産であることが分った。当分は纏向遺跡で行くしかない。又周脾算経の影寸千里や鉄、絹の遺物など不利になるものは捨ておけとのことか。千里76Km は科学的。当然だが真摯にやれば誰でも同様の結果が出る。畿内説者も真摯な態度で確かめて頂きたい。数百キロ程度の離れなら地球を平面的に考えた所で大きな誤差にはならない。すべてを原書通りに進めば、三国志にある邪馬壹国はどうやっても畿内にはいかない。</p>

争点項目	他説と自説	
14. 北部九州説	他	伊都国からの方位、距離に誤認がある。伊都国からは放射状になっているとの説。
	自	方位も距離も誤認などはない。放射状説も文面から矛盾がある。周脾算経には影寸千里や方角の出し方も載っている。にもかかわらず古田氏も谷本氏も何故方向誤認説の旗を下さないのかわからない。遠距離の測量技術はあったが唐津からの方向は誤認したとの根拠は何か。技術者なら先ずは原本通りやるべきではないのか。
C 考古学関係		
1. 表記の鏡はどんな鏡なのか	他	畿内説は三角縁神獸鏡としていたが最近は他の見解もある。
	自	不明。
2. 卑弥呼の墓はどこにあるのか	他	奈良の箸墓古墳の他いろいろな説ある。
	自	幾つか推測はできるが、まだ確たるものではない。
3. 卑弥呼の住まいは纏向遺跡か	他	纏向遺跡で建物の遺構が見つかり、卑弥呼の住まいではないかとNHK ニュースにもなった。
	自	ニュースにした背景はわからないがNHK は畿内説支持なのかな。方向からも距離からも女王の都ではない。
4. 吉野ヶ里はどここの国なのか	他	少ないが邪馬壹国という説もある。他に説は無い。伊都国からの方位も距離も合致する国が無い。あれほどの同時代の遺構が突然現われたが、誰も国名がわからない。
	自	伊都国の比定地が間違っているからだ。唐津からの方位も距離も原文通りに進めば、吉野ヶ里も読めて来る。伊都国の政治の中心地は現佐賀城址で、ベットタウンが吉野ヶ里だろう。

33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	
魚	稽	其	萬	王	有	躬	鬼	次	好	支	其	七	A
蛤	斷 _斷	使	二	其	奴	臣	國 ₂₁	有	古	國 ₁₀	餘	萬	B
丈	髮	詣	千	官	國 ₂₉	國 ₂₅	次	蘇	都	次	旁	餘	C
身	丈	中	餘	有	此	次	有	奴	國 ₁₄	有	國	戶	D
亦	身	國	里	狗	女	有	為	國 ₁₈	次	伊	遠	自	E
以	以	皆	男	古	王	巴	吾	次	有	邪	絕	女	F
厭	避	自	子	智	境	利	國 ₂₂	有	不	國 ₁₁	不	王	G
大	蛟	稱	無	卑	界	國 ₂₆	次	呼	呼	次	可	國	H
魚	龍	大	大	狗	所	次	有	邑	國 ₁₅	有	得	以	I
水	之	夫	小	不	盡	有	鬼	國 ₁₉	次	都	詳	北	J
禽	害	夏	皆	屬	其	支	奴	次	有	支	次	其	K
後	今	后	黜 _墨	女	南	惟	國 ₂₃	有	姐	國 ₁₂	有	戶	L
稍	倭	少	面	王	有	國 ₂₇	次	有	華	奴	次	斯	M
以	水	康	丈	自	狗	次	有	奴	國 ₁₆	有	馬	道	N
為	人	之	身	郡	奴	有	邪	蘇	次	彌	國 ₉	里	O
飾	好	子	自	至	國 ₃₀	烏	馬	奴	次	奴	次	可	P
諸	沈	封	古	女	男	奴	國 ₂₄	國 ₂₀	對	國 ₁₃	有	得	Q
國	沒	於	以	王	子	國 ₂₈	次	次	蘇	次	有	略	R
丈	捕	會	來	國	為	次	有	有	國 ₁₇	有	百	載	S

46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	
頭	浴	喪	棺	其	菜	骨	鵠	紵	髮	木	當	身	A
不	以	主	無	身	皆	鏃	兵	麻	屈	縣	在	各	B
去	如	哭	槨	體	徒	所	用	蠶	紵	招	會	異	C
蟻	練	泣	封	如	跣	有	矛	桑	作	頭	稽	或	D
蝨	沐	他	土	中	有	無	楯	緝	衣	其	東	左	E
衣	其	人	作	國	屋	與	木	績	如	衣	治	或	F
服	行	就	冢	用	室	僮	弓	出	單	橫	之	右	G
垢	來	歌	始	粉	父	耳	木	細	被	幅	東	或	H
污	渡	舞	死	也	母	朱	弓	紵	穿	但	其	大	I
不	海	飲	停	食	兄	崖	短	縑	其	結	風	或	J
食	詣	酒	喪	飲	弟	同	下	縣	中	束	俗	小	K
肉	中	已	十	用	卧	倭	長	其	央	相	不	尊	L
不	國	葬	餘	籩	息	地	上	地	貫	連	淫	卑	M
近	恒	舉	日	豆	異	温	竹	無	頭	略	男	有	N
婦	使	家	當	手	處	暖	箭	牛	衣	無	子	差	O
人	一	詣	時	食	以	冬	或	馬	之	縫	皆	計	P
如	人	水	不	其	來	夏	鐵	虎	種	婦	露	其	Q
喪	不	中	食	死	丹	食	鏃	豹	禾	人	紵	道	R
人	梳	澡	肉	有	塗	生	或	羊	稻	被	以	里	S

59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	
交易	尊卑	訟其	婦下	人壽	<small>知正歲四節但計 春耕秋收為年紀</small>	兆其	卜以	有獮	香其	玉其	疾病	名之	A
有無	各有	犯法	戶或	考或		會同	占吉	猴黑	竹篠	山有	遭暴	為持	B
使大	差序	輕者	二三	百年		坐起	凶先	雉其	籐桃	丹其	害便	衰若	C
倭監	足相	没其	婦婦	或八	見大	父子	告所	俗舉	支有	木有	欲殺	行者	D
之自	臣服	妻子	人不	九十年	人所	男女	卜其	事行	薑橘	柵杼	之謂	吉善	E
女王	収租	重者	淫不	其俗	但搏	無別	辭如	來有	樞襄	豫樟	其持	共顧	F
國以	賦有	没其	妬忌	國大	手以	人性	令龜	所去	荷不	棹櫪	不謹	其生	G
北特	邸閣	門戶	不盜	大人	當跪	嗜酒	法視	為輒	知以	投櫃	出真	口財	H
置一	國有	及宗	竊少	皆四	拜其	<small>魏略曰</small>	火坼	灼骨	以為	烏獠	珠青	物若	I
大市			諍	五			占	而	滋味	楓		有	J

72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	
里	又有	持兵	飲食	以來	能惑	伐歷	其國	或跪	下戶	臨津	史王	率檢	A
又有	侏儒	守衛	傳辭	少有	衆年	年乃	本亦	兩手	與大	搜露	遣使	察諸	B
裸國	國在	女王	出入	見者	已長	共立	以男	據地	人相	傳送	詣京	國畏	C
黑齒	其南	國東	居處	以婢	大無	一女	子為	為之	逢道	文書	都帶	憚之	D
復在	人長	渡海	宮室	千人	夫婿	子為	王住	恭敬	路逡	賜遺	方郡	常治	E
在其	三四	千餘	樓觀	自侍	有男	王名	七八	對應	巡入	之物	諸韓	伊都	F
東南	尺去	里復	城柵	唯男	弟佐	曰卑	十年	聲曰	草傳	詣女	國及	於國	G
南船	女王	有國	嚴設	男子	治國	自為	倭亂	噫此	辭說	王不	郡使	中有	H
行一	四千	皆倭	常有人	一人	給		相攻	如然	事或	得差	倭國	如刺	I
年可	千餘	種						諾	蹲	錯	皆		J
至													K

85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	
此應	綬	升	孝	紫	汝	班	使	卑	都	等	五	參	A
字為	引	米	順	綬	之	布	都	彌	其	詣	千	問	B
不綈	見	為	汝	裝	忠	二	市	呼	年	郡	餘	倭	C
體漢	勞	率	來	封	孝	匹	牛	帶	十	求	里	地	D
非文帝	賜	善	使	付	穡	二	利	方	二	詣	景	絕	E
魏著	遣	中	難	帶	甚	丈	奉	太	月	天	初	在	F
朝早	還	郎	升	方	哀	以	汝	守	詔	子	二	海	G
之衣	今	將	米	太	汝	到	所	劉	書	朝	年	中	H
失謂	以	牛	牛	守	今	汝	獻	夏	報	獻	六	洲	I
傳之	絳	利	利	假	以	所	男	遣	倭	太	月	嶋	J
寫弋	地	為	涉	授	汝	在	生	使	女	守	倭	之	K
者綈	交	率	遠	汝	為	踰	口	送	王	劉	女	上	L
誤是	龍	善	道	其	親	遠	四	汝	曰	夏	王	或	M
也也	錦	校	路	綬	魏	乃	人	大	制	遣	遣	絕	N
緯	五	尉	勤	撫	倭	遣	女	夫	詔	吏	大	或	O
地	匹	假	勞	種	王	使	生	難	親	將	夫	連	P
縞	以	銀	今	人	假	貢	口	升	魏	送	難	周	Q
粟	為	印	以	勉	金	獻	六	米	倭	詣	升	旋	R
刻	地	青	難	為	印	是	人	次	王	京	米	可	S
十													

98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	
國	授	中	縑	大	物	綬	始	汝	十	匹	賜	張	A
男	其	郎	縣	夫	倭	詣	元	國	斤	金	汝	禧	B
王	八	將	衣	伊	王	倭	年	中	皆	八	紺	絳	C
卑	年	印	帛	聲	因	國	太	人	裝	兩	地	五	D
彌	太	綬	布	耆	使	拜	守	使	封	五	句	十	E
弓	守	其	丹	掖	上	假	弓	知	付	尺	文	匹	F
呼	王	六	木	邪	表	倭	遵	國	難	刀	錦	紺	G
素	頌	年	狔	拘	荅	王	遣	家	升	二	三	青	H
不	到	詔	短	等	謝	并	建	哀	米	口	匹	五	I
和	官	賜	弓	八	詔	齎	中	汝	牛	銅	細	十	J
遣	倭	倭	矢	人	恩	詔	校	故	利	鏡	班	匹	K
倭	女	難	掖	上	其	賜	尉	鄭	還	百	華	荅	L
載	王	升	邪	獻	四	金	梯	重	到	枚	蜀	汝	M
斯	卑	米	狗	生	年	帛	儁	賜	錄	真	五	所	N
烏	彌	黃	等	口	倭	錦	等	汝	受	珠	張	獻	O
越	呼	幢	壹	倭	王	蜀	奉	好	悉	鈿	白	貢	P
等	與	付	拜	錦	復	刀	詔	物	可	丹	絹	直	Q
詣	狗	郡	率	絳	遣	鏡	書	也	以	各	五	又	R
郡	奴	假	善	青	使	采	印	正	示	五	十	特	S

					106	105	104	103	102	101	100	99	
					青	還	遣	年	更	百	拜	說	A
					大	因	倭	十	相	餘	假	相	B
					句	詣	大	三	誅	步	難	攻	C
					珠	臺 _台	夫	為	殺	徇	升	擊	D
					二	獻	率	王	當	葬	米	狀	E
					枚	上	善	國	時	者	為	遣	F
					異	男	中	中	殺	奴	檄	塞	G
					丈	女	郎	遂	千	婢	告	曹	H
					雜	生	將	定	餘	百	喻	掾	I
					錦	口	掖	政	人	餘	之	史	J
					二	三	邪	等	復	人	卑	張	K
					十	十	狗	以	立	更	彌	政	L
					匹	人	等	檄	卑	立	呼	等	M
						貢	二	告	彌	男	以	因	N
						白	十	喻	呼	王	死	齋	O
						珠	人	壹 _壹	宗	國	大	詔	P
						五	送	與	女	中	作	書	Q
						千	政	壹 _壹	壹 _壹	不	冢	黃	R
						孔	等	與	與	服	徑	幢	S

海島算経抜粋要訳

海島算経	晋 劉 徽 撰	唐 李 風 注	<p>今有望海島立兩表齊高三丈前後相去千步令後表與前表參相直從前表卻行一百二十三步人目著地取望島峯與表末參合從後表卻行一百二十七步人目著地取望島峯亦與表末參合問島高及去表各幾何答曰島高四里五十五步去表一百二里一百五十步</p>	要訳	<p>海の向こうの島を向いて長さ三丈の棒を持って立ち、千歩前後する。たとえば、最初の地点(A)に伏して島峯を望み、三丈の棒を立て前方に移動させる。棒の先端と島峯がぶつかった地点に目印をして距離を測ると、百二十三歩だった。</p>
			<p>次に最初の地点から千歩後退して同じ棒を立てる。その先端と島の峰が一致する地点まで後退する。調度百二十七歩だった。</p>		<p>この島の高さ及び水平距離はいくらかを問う。 答えは、島の高さは四里五十五歩で水平距離は百二里百五十歩になる。</p>
			<p>(ただし別記したようにこれは間違っている。正しくは高さ四里六十九歩。水平距離百十五里百五十五歩になる。)</p>		

周髀算經 拔粹

周髀算經

漢趙甌

(拔粹)

<p>識其端相去二尺三寸</p>	<p>其繩致地識去表丈三寸故天之中去周十萬三千</p>
<p>日加卯酉之時望至地之相去子也</p>	<p>里</p>
<p>故東西極二萬三千里</p>	<p>北極東西之時与天中齊故以所望表勾為天之</p>
<p>影寸千里故為東西所到之里數</p>	<p>去周之里數</p>
<p>其兩端相去正東西</p>	<p>何以知其南北極之時以冬至夜半北游所極也北</p>
<p>以繩至地所謂兩端相直為東西之正也</p>	<p>過天中萬一千五百里以夏至南游所極不及天中</p>
<p>中折之以指表正南北</p>	<p>万一千五百里此皆以繩繫表顛而希望之北極至</p>
<p>所識兩端之中与表為南北之正</p>	<p>地所識丈一尺四寸半故去周十二万四千五百里</p>
<p>加此時者皆以漏揆度之此東西南北之時</p>	<p>過天中万一千五百里其南極至地所識九尺一寸</p>
<p>冬至日卯酉者北極之正東西日不見矣以漏</p>	<p>半故去周九萬一千五百里其南不及天中萬一千</p>
<p>度之者一日一夜百刻從半夜至日中從日中至</p>	<p>五百里此璣璣四極南北過不及之法東西南北之</p>
<p>夜半<small>無</small>冬夏常各五十刻中分之得二十五刻加極</p>	<p>正勾</p>
<p>卯酉之時揆亦度也</p>	

旧唐書・隋書抜粋

【旧唐書】^{くとうじょ} 945年完成（下記は解説書による）

「倭国者、古倭那国也。去京師一萬四千里、在新羅東南大海中、依山島而居。東西五月行、南北三月行。世與中国通。其国、居無城郭、以木為柵、以草為屋。四面小島五十余国、皆附属焉。其王姓阿每氏、置一大率、檢察諸国、皆畏附之。……貞觀五年、⁶³¹遣使献方物。……至二十二年、⁶⁴⁸又附新羅奉表……

日本国者、倭国之別種也。以其国在日辺、故以日本為名。或曰：倭国自惡其名不雅、改為日本。或云：日本舊小国、併倭国之地……又云：其国界東西南北各数千里、西界、南界咸至大海、東界、北界有大山為限、山外即毛人之国。長安三年、⁷⁰³其大臣朝臣真人来貢方物、」

倭国は古の倭那国なり。……

日本国は倭国の別種なり。その国は日の出の場所にあるが故に日本と名付けた。ある人曰、倭国は自ら悪しきその名が雅でないので、改めて日本としたのである。ある人云う、日本は以前は小国だったので、倭国の地を合わせた。

【隋書】^{ずいしょ} 636年50巻完成 656年30巻完成（下記は解説書による）

倭国は百済新羅の東南、水陸三千里にある。大海中の山島によっている。
魏の時代、中国と通じたのは三十余国で皆王が自称した。東夷の人は里数を知らない。ただ日を以て計っている。

その国の境は東西に五カ月、南北に三カ月の行程で、各々海に至る。その地形は東高西低、都は邪靡堆、魏志の説に則れば、邪馬臺（台）というなり。古伝承では楽浪郡の境および帯方郡から一万二千里、会稽の東に在り、……
（(実には三国志は邪馬臺(一)国になっているが、吉治)）

後漢の光武帝の時（25-57年）、遣使が入朝し、大夫を自称した。
安帝の時（106-125年）、また遣使が朝貢、これを倭奴国という。
桓帝と靈帝の間（146-189年）、その国は大いに乱れ、順番に相手を攻伐し、何年もの間、国主がいなかった。卑弥呼という名の女性がおり、鬼道を以てよく大衆を魅惑した。この時国の人々が共に立て王となした。

阿蘇山があり、そこの石は故なく火を起し天まで昇る、俗人はこれを恐異となし、よって祈祭を行う。

下線筆者記

谷本茂氏の一寸千里の補足説明

本図は、谷本氏の考えを筆者が表記したものです。

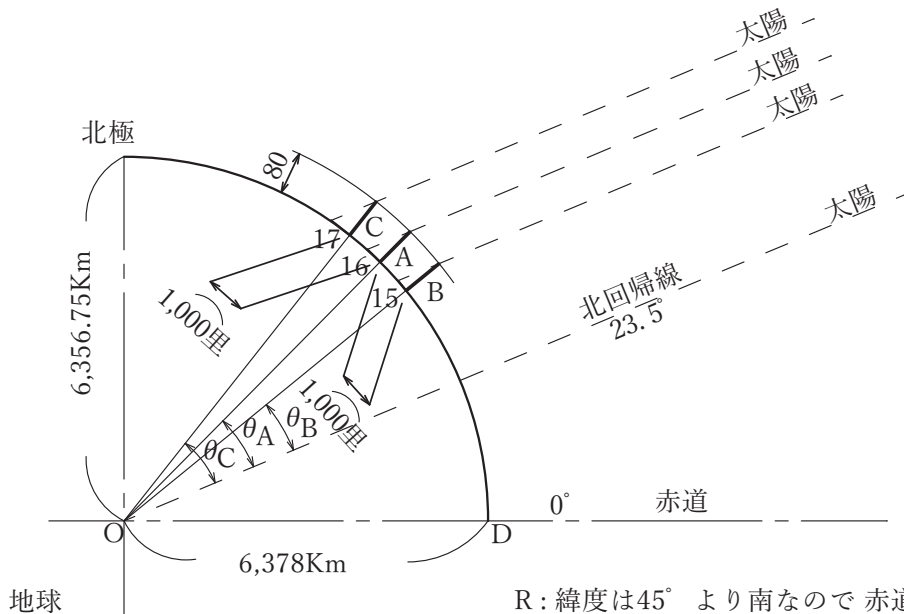


図 1 8

R: 緯度は45°より南なので赤道半径の
6,378Kmを用いることにする。

π : 3.14159

θ : $\tan^{-1} \frac{15 \sim 17}{80}$ ラジアン これが影倍率

θ_B :	0.1875	ラジアン	= 10.6196°) 差0.690°
θ_A :	0.2	ラジアン	= 11.3099°	
θ_C :	0.2125	ラジアン	= 11.9969°	

↑
緯度の差

$$\widehat{AB}, \widehat{AC} = 2 \times \pi \times R \times \theta^\circ / 360^\circ$$

$$\widehat{AB} = 2 \times 3.14159 \times 6378 \times 0.69 / 360 = 76.808 \text{ Km}$$

$$\widehat{AC} = 2 \times 3.14159 \times 6378 \times 0.687 / 360 = 76.474 \text{ Km}$$

平均 76.64 Km

橋本のコメント

前二世紀頃の中国の書『周髀算経』に「影寸千里」とある。これは、二点間で影の差が一寸ある時は南北に千里離れているということなのだが、これが真実なら古代中国にはすぐれた測量方法があったことになり、魏志倭人伝の里数も真実な可能性がでてくる。谷本氏は影倍率を求めて、それに地球の極半径を掛けて出している。

橋本は職業柄、各地の影倍率を知っているので、それと緯度一度を 111.317Km とし て算出した。地球の極半径を用いるより正確になる。

少し分かりにくいかもしれないがどうか、この物理と算術を多くの方に御理解いた だきたい。(このことに関しては) 谷本氏に心から称賛を贈りたい。

近年、谷本氏の解釈は蓋天説でないので間違いだとする某大学の名誉教授がいるが、 地球は昔も今も丸いので、その地点で測った影の長さも今昔とも変わりはない。 したがって、理は机上学でよいが、実には現実の影長によるべきで谷本氏の説が正しい。

算経十書概略

No.	名称	著者	成立年代	備考(記載事項等)
1	孫子算経	孫武か 李淳風註	前4世紀頃	一步六尺 十尺一丈 一里三百歩 鶴亀算
2	周髀算経	不明 趙 𧇗	前2世紀頃	歴学の基本書 夏至冬至春分秋分 句股定理, 蓋天説 一日一夜百刻 一步八尺 立八尺 影寸千里 一歳三百六十五日四分日之一
3	数書九章	九韶撰 劉徽註	1世紀頃	重差術 方田、粟米、衰分、少広、高功、均輸、 盈不足、方程、句股
4	綴術	祖沖之	2世紀頃	円周率、球体積 命位法、進法 (現存しない)
5	海島算経	漢の徐岳撰 北周の甄鸞註 劉徽撰 李淳風註 晋 劉徽撰 唐 李淳風註	2世紀頃	数書九章の十章が唐代に独立 測量方法と算術 一步六尺
6	五曹算経	北周の甄鸞	2世紀頃	役人に必要な算術の基本知識 田、兵、集、倉、金曹
7	夏侯陽			原本はない
8	絹古算経	王孝通撰	唐代著	開帯従立法
9	張丘建算経	張丘建	466~484年	
10	五経算術	北周の甄鸞撰	6世紀	書経、詩経、易経、春秋、礼記

参考文献

周髀算経	漢 趙 𧇗	
周髀算経図解	川辺百彌信一	「周は八尺を一步とし、三百歩を一里とす、 秦漢は六尺を一步とし、三百歩を一里とす」
数書九章	宋 九韶	
海島算経	晋 劉徽	
海島算経	漢 徐岳 写本	
孫子算経		写本
五曹算経	北周の甄鸞	
張丘建算経	張丘建	
絹古算経	王孝通撰	
三国志		
後漢書		東夷列伝
旧唐書	石原道博編訳	旧唐書倭国伝・宗史日本伝・元史日本伝
隋書		倭国伝
伊能図	武揚堂	
日照計画の進め方	顕国社	

邪馬壹国論争比定地

邪馬壹国の比定地については、江戸時代以降現在に至るまで、数多くの説が飛び交っています。

方位回転説、長短里説、放射説、三角縁神獸鏡説、植生、生産物、言語様々な見地から多岐に渡って真剣な論議が続いています。今まで、熱量学的見地からの探求は少数でした。本説が大きな一石となり、さらなる進展を願います。

比定地		氏名	比定地		氏名	比定地		氏名
九州説			宮崎県	西都市	原田常治	その他の地域		
福岡県	北部九州	和辻哲郎 井上光貞 藤岡生大 他大勢	鹿児島県	鹿児島	加治木義博 王仲殊	大阪府	大阪市	大熊規短男
	筑後川流域	山村正夫		霧島山一帯			難波	泉隆氏武
	福岡市博多	松本清張 古田武彦 他大勢		大隅半島	那珂通世	京都府	京都市	江戸達郎
	大宰府市近辺	松田正一 佐藤鉄章		そお郡	吉田東伍	滋賀県	琵琶湖畔	
	筑後山門郡	新井白石 橋本増吉 津田左右吉 他大勢		九州南部	本居宣長		野洲町	大内規夫
	筑後御井	植村清二		奄美大島	小林恵子	和歌山県	紀州一帯	立岩巖
	筑後京都郡	重松明久	中部九州	熊本～延岡 女王の都は高千穂町	橋本吉治(筆者)	北陸地方		小島信一
	筑後田川郡	坂田隆他				新潟県	栃尾市	
	甘木、朝倉郡	安本美典 高倉盛雄 木村俊夫 他大勢	沖縄県		木村政昭	石川県	眉丈山	
	八女郡	中堂観恵 井沢元彦他					羽咋市	能坂利雄
佐賀県	筑紫平野	藤沢偉作他	畿内大和説			福井県	鯖江市	
長崎県	島原	宮崎康平	近畿内		笠井新也 原田大六 和歌森太郎 他	長野県	諏訪地方	武智鉄二
	千綿	野津清	大和		田口賢三 青木慶一 小林行雄 他大勢	山梨県	逸見高原	
	佐世保	恋塚春男	奈良県	桜井市		東海地方		
	大村湾東岸	鈴木勇		天理市		静岡県	登呂	
熊本県	肥後山門	近藤芳樹 白鳥庫吉		三輪山麓	肥後和男 三品彰英 大庭脩 高城修三		南伊豆下田	肥田政彦
	玉名市	宮崎康平		郡山	鳥越憲三郎	旧東山道	近海～陸奥	
	玉名郡江田村	古屋清		飛鳥	新妻利久 坂田隆 佐原真	山梨県	逸見高原	
	阿蘇郡	藤井甚太郎 渡邊豊和	四国説			千葉県	安房上総	伊藤邦之 鈴木正知
	阿蘇郡山都町	藤芳義男	愛媛県	川之江	大森忠夫	ジャワ・スマトラ		内田吟風
	下益城郡佐俣町	安藤正直他		松山	浜田秀雄	エジプト		木村鷹太郎
	人吉市	工藤篁 三瓶精二		四国東半		太平洋海中		
	山鹿市	鈴木武樹	徳島県	阿波国	岩利大閑他	偽書説		岡田英弘
	八代市	李鉦埼		高根				
	東九州	石崎景三他		四国山頂	大杉博			
	菊池川流域	岩下徳蔵	高知県	伊野町				
大分県	宇佐市	神西秀憲	中国地方説					
	別府湾岸	山本武雄	吉備	日差山	久保幸三			
	中津市	横堀貞次郎		岡山・香川	広島輝治			
宮崎県	日向	林屋友次郎 尾崎雄二郎		吉備津神社				
	延岡	小田洋		熊山町				
	霧島山周辺	高津道昭	出雲	出雲市				
	西都原	清水正紀	安芸	府中村				

参考資料：INT-rendaico、国立国会図書館HP

著者プロフィール

橋本 吉治 はしもと よしはる

1950年、福島県いわき市に生まれる

福島県立平工業高等学校精密機械科卒業

日本工業大学建築学科卒業

元西研（古建築・建築史）所属、教職課程修了

（有）吉治総合設計事務所 経営

一級建築士、耐震診断（士）

三国志 倭人傳「邪馬壹国女王都」を計測する
—周髀算経の影寸千里を検証 方角も距離も正しかった海島算経を図解—

発行日 2020年10月12日

著者 橋本 吉治

勿来の関研究会

URL <https://nakosonosekikenkyukai.com>

Mail info@nakosonosekikenkyukai.com

印刷 有限会社 平電子印刷所

〒970-8024 福島県いわき市平北白土字西ノ内13番地

TEL 0246 (23) 9051
